



道

求

第
四
號

第
拾
壹
卷

求道第拾壹卷第四號目次

求道

◎此時局を奈何せん

(佛智不思議を信ぜよ)

講義

◎歎異鈔

近角常觀

第十三章

◎『教行信證』信卷(菩提心釋より)

近角常觀

第二席 菩提心釋

- 一 凡夫と佛と連絡の問題
- 二 『選擇集』の教示と菩提心
- 三 得度い／＼といつ迄も得られぬ
- 四 淨土の大菩提心
- 五 法然聖人と親鸞聖人の違ひ目
- 六 念佛は無碍の一道
- 七 人眞爲正要
- 八 『論註』の文

告白

◎信仰近信二章

一

宮澤磯吉

二

原田俊之助

講話

◎諸の如來と等し

近角常觀

時報

◎求道學會第二求道會講話概況

每日曜午前九時

求道學會

(本郷區森川町一帯地)

毎土曜午後二時

第一求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月二日午後七時

第三求道會

(日本橋區設町説教所)

●第四回夏季求道會●

詳細廣告欄ニ在リ

求

道

第拾壹卷
第四號

此時局を奈何せん

(佛智不思議を信ぜよ)

○佛智不思議を信ずると否とは、他力眞宗たると否との分水嶺である、是が人生上如何ともすべからざる我等を救済したまふ大威神である故に、一たび之を信ずる已上は、人生如何なる出来事に對しても必ず自ら解決の方法があるのである。

○先づ信仰の一念に不思議の佛智を信ずる點より始めやう、抑々現代の思潮につきて考ふるに、一方には現實主義、事功主義、自然主義等ありて、徒に結果を追ふて殆んど手段の如何を顧みず、漫に自己の性情の欲する所を縦にして、底止するなきものがある、此に於てや一方には律法主義、嚴正主義、刑名主義起りて、他まで是非善惡を明にし、勸善懲惡の方法によりて、時弊を矯正せんと試むるに至るのである。

○今や我國は思想界、教育界、政治界、宗教界に至るまで、此二傾向の戦が頂上に達して、種々破天荒の出来事が現出し

つゝあるのである、前者の不可なるは言ふまでもなきことながら、後者の方法が果して時弊を廓清して果して、清明の天地を開闢し得らるゝであらうか。

○罪あれば禍を得、善あれば福を得る罪福主義で人生を救済し得べしとするならば、結局癡惡修善てやり通すことが出来るといふ自力主義である、固より邪見に陥りて是が當世なりと言ふて違法を敢てし、罪惡救済の名の下に放縱主義に奔るが如き非を矯める方便權假の方法たるには違ひなけれども、他まで罪惡を救済し、煩惱を悲憫し、憍慢を懺悔せしめ、憍慢を慚愧せしめて、清淨なる光明中に攝取せらるゝことは出来ぬ、近時刑事政策が國家唯一の威力となりて、政治界も教育界も宗教界も、殆んど其脚下に蹂躪せらるゝの概あるは、一時臨機應急の策たるべきも、決して社會を根本的に救ふの道ではない、恐くは人心をして却て荒廢に陥らしむるものではないか、而して一人之を咎むるものなく、上下冷眼を以て寧ろ會心を以て之を迎ふるの傾あるは、將來頗る寒心すべきものがある。

○今時予の如き言をなしたるものはなからう、併し信仰の眼より眞面目に考へて見るがよい、人間誰か敢然として他人を

罰し得る力あるか、かく言へばとしてトルストイの如く、裁判を否定するのでもなく、現實主義、事功主義、自然主義の味方をするのでもない、刑名主義一邊を以て人生を救ひ得ると考へつゝある偏重せる刑事政策者流の蒙を啓かんために一言したるのである。

○然らば何を以て人生を救ひ得べきか、曰く佛智不思議である、佛智不思議とは何事であるか、罪惡でもよいといふ横着主義ではない、煩惱でもよいといふ氣儘主義でもない、其横着なる我儘なる我等に對して、飽まで見捨てたまはぬ眞實の親心である、否横着に躓き、氣儘に行きつゝまり、律法主義、嚴正主義、刑名主義の桎梏に苦しめられて、如何ともすべからざる地獄必定の我等に對して、無限大慈の涙を以て我等が苦惱を悲憫したまふ親心である。

○此時局を奈何せん、是苟も心あるもの、胸中に自問自答せんとする問題である、而して未だ眞の解決をきかぬ、現實主義事功主義を生命とせる政治界が分からぬのは無理もなく、律法主義、形式主義に囚はて居る教育界の氣附かぬも當然なるも、本願不思議を以て生命とする眞宗夫自身が、此信仰的解決を悟らざるはあまりと言へばあまりではないか、勿論此本

願不思議が標榜するが如く生きて信ぜられて居たならば、今日の時局は来る筈はない、して見れば忽ち此本願不思議に救はるゝことに氣附かぬも無理なきことである、否寧ろ此本願の不思議をいたゞかねばならぬ様なる時機に追ひつめられてあるのである、警鐘は撞かれてあるのである、火の手は上りて居るのである、他家の火事ではない、各々自家頭に燃えつゝあるのである、和讃に曰く、釋迦韋提方便して、淨土の機縁熟すれば、雨行大臣證として、閻王逆惡興ぜしむ、信仰の機縁正に純熟してあるのである。

○此際制度政策等の現實主義事功主義を以て救はんとするは、火を以て火を救はんとするのである、宗教界が俗界の眞似をするのによりて火を失したのではないか、而して俗界の眞似事によりて火を救はんとするは駄目である、律法主義や嚴正主義を今更呼號して人を責めて居るは何事ぞ、既に刑名政策の律法主義の打撃によりて傷きて井に落ちたるものに對して、猶石を落さんとするの殘酷を敢てして、結局如何にせんとするか、他家の火事の如く高見見物するもの、既に火が全般に回りつゝあることが分からぬか、實に煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界である。

○嗚呼そらごととなるかな、たはことなるかな、虚假なるかな、不實なるかな、何等の策もなく、何等の術もなし、此の如く何れの道をも見出すことの出来ぬ我等を悲憫したまふが本願の不思議である、煩惱具足の凡夫は何れの行にても生死を離るゝとあるべからざるを憐みたまひて、願を起したまふ本意惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり、此一大人生問題によりて直に本願不思議をいたゞくべきである。

○何ともして見ようがない、施すべき術がない、無策である、とても人間のはからひては間に合はぬ、全體今まで人間の淺薄なる猿智慧やら、虚勢を以て世を欺き得べし、人を誤魔化し得べしと思ふのが間違である、世の所謂政策、謀術なるものが皆駄目なる所以である、かくの如く人間の何とも爲て見よるのなきものを憐みたまふ如來の大慈である、人間のはからひたえはて、如來の遣る瀨なき御はからひにはからはれ奉るのである、かく言へばとて無爲無策で茫然として居れといふのではない、かくの如く如何ともすべからざるを飽まで見捨てたまはぬ大悲大願が、誓願の不思議である、佛智の不思議である、須らく此不思議の佛智の下に我等の罪惡を懺悔慚愧

すべきである、是が義なきを義とすである、無策の策である。○此に大に注意すべき點がある、世人は自覺である自覺であると叫んで居る、而して其自覺の何たるかを悟らぬ、信心じや、唯信佛語じやと高く標榜したとて一體どうするのじや、嘗て或人が念佛主義じやといふて倒れた人がある、晦巖和尚は火事の時小僧が佛前に出て、消災陀羅尼を高唱して居つたら、水を頭からぶつかけて寝とぼけるなといふたといふ話がある、此際の信心じや、念佛じや、自覺じやといふのは、一體どうすることじや。

○今日已後は信仰でやるのじやと發表でもすると思ふべからず、ソロソロ佛前に詣て念佛すると思ふべからず、今が實に私が常に云ふ仕て見ようのなき時ではないか、何れの行も及びがたき身なれば地獄は一定すみかてはないか、仕て見ようのなきものをあはれみたまふといふは、實に此時局を憐みたまふのではないか、何れの行にても生死を離るゝことあるべからざることを憐みたまふといふは、今現に何んとも仕て見ようのなきを飽まで悲憫したまふのである、哀愍攝受したまふのである、是がかねて待兼ねたまふ本願招喚の御呼聲である。

○しかも其本願の御思召は、其悪しきもの、苦しめるもの、して見ようのなきもの、煩惱具足の我等、破戒無戒の凡愚、五逆十惡の徒を飽まで見捨てたまはぬ親心である、唯除五逆誹謗正法と抑止したまひし釋尊も、阿闍世王の逆惡興るに及びては我爲阿闍世不入涅槃と仰せられた、是が如來の密語は不思議である、殺されたる頻婆沙羅王は、阿闍世王に對して耆婆の言に従ふて、佛の所に詣つべしと告命された、釋尊は阿闍世王に對して、汝罪あるべくは我等諸佛も亦罪あるべしと仰せられた、七重の室内に幽閉されたる韋提希夫人に對して、汝今知るや否や阿彌陀佛此を去ること遠からずと仰せられた、是本願成就の盡十方無碍光如來を信知せよとの仰せである、願力無窮にましますば、罪業深重もあからず、佛智無邊にましますば、散亂放逸もすてられず、四方八方見捨て、願みものなき逆惡の我一人をたすけんとおぼしめしたまひし御苦勞が、五劫思惟の本願である、選擇願心である、誓願の不思議である、佛智不思議である、不可稱不可說不可思議の南無阿彌陀佛である。

○さう様がわるいと私の言も小僧の消災陀羅尼一様の看をなすものが多いであらう、其様な念佛なれば、定善の氣休め念利益他の至誠心にてまします、此如來の御まことをさかば、いかにそらごと、たはごと、まことあることなき我等も、頭が下りて慚愧懺悔せねばならぬ。釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり、真心徹到するひとは、金剛心なりければ、三品の懺悔するひと、ひとしと宗師はのたまへり、是即如來の不思議を信したのである、佛智の不思議を信したのである。

○不思議の佛智を信するを、報土の因としたまへり、信心の正因うることは、かたきかなかになほかたし、是即ち如來の加威力によりて、大悲廣慧の力によりて信樂開發するの一念である、廣大難思の慶心があらはるゝのである、人生問題に於て入々が信樂獲得するは、唯此親心をさくばかりである、否聞く一念に親心が届くのである、無限大悲の親心に對して疑ふ餘地がないのである、疑蓋無雜の信心歡喜である、信樂開發の一念である、是不可思議の大信心海である、是劈頭に掲げ來りたる信仰の一念に佛智不思議を信することである、是實に眞宗の眞宗たる點である。

○是即ち時局に對する徹底したる解決である、茲に初めて我等迷妄の夢醒めて、罪惡の我身たるを自覺して、唯不可思

佛、散善の努力念佛であらう、私の言ふのは何れの行もおよびがたき地獄必定の私に對して、三世十方の間唯一の救済の念佛である、大悲大願の行である、淨土眞實の行である、選擇本願の行である、圓融至徳の嘉號、轉惡成徳の正智である、本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提無二と、すみやかにとくさとらしむ、如何なる罪惡深重煩惱熾盛の我等の心中に、徹到せずんば止まぬといふ大誓願不可思議力である。

○悪くてもよいといふは自然主義である、人も亦惡いのでやといふは現實主義である、悪くても可かぬといふは律法主義である、自力主義である、刑名主義である、しかるに惡しき我等に對して、惡しければ惡しき程見捨てられぬといふは、如何に深重なる親心ぞや、母の悲愍は動もすれば寛容主義の放縱主義にさあやまるものがある、それなれば不思議でも何んでもない、不思議といふは人も我も決して許さぬ、許されぬといふ罪惡に對して、飽まで見捨てられぬといふ大慈大悲である、我等の如き不實極まるものは、誰も顧るものなきが當然なるに、其不實極る私を見捨てられぬといふ如來の眞實清淨の大慈大悲の御親心こそ、實に不可稱不可說不可思議回向

議を信じたてまつるばかりである、念佛は洵に淨土に生るゝたねにてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべらん總じてもて存知せざるなり、一たび佛智の不思議を信じたてまつりたる已上は、時局は如何になりゆくか結果の如何を顧みる餘地はないのである、たとひ法然上人にすかされまわらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候、佛智不思議を信じたてまつれば、たとへ之がために如何なる苦痛に陥りてもさらに後悔はないのである、何んとなれば此私のために、たとひ身を諸の苦毒の中に終るとも、我行精進にして忍びて終に悔はずと仰せ下さる御慈悲が難有い、此御慈悲は私が必定地獄におつべきことを見捨てたまはぬ御心にてまします、此慈悲をいたゞき奉れば、阿闍世の告白せられし如く、たとひ無量阿僧祇劫阿鼻地獄に落つるも以て苦みとせぬのである、況んや時局が如何になりゆくも更に後悔すべからず候である、かくてこそ時局は解決されたるのである、往生ほどの大事凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべきなり、すべて凡夫にかぎらず補處の彌勒を初めとして、佛智の不思議をはからうべきにあらず、まして凡夫の淺智をや、かへすゝも如來にまかせ

たてまつるべきなり。

○是徹底せる時局の解決である、否如何なる時に於ても徹底の解決である、亦如何なる問題も言下に解決が出来るのである、何んとなれば定散自力の解決でないからである、他力の廻向の解決である、されど他力といふことを、單に空しく成行にまかすことと考へてはならぬ、如何なる場合に於ても我等を飽まで見捨てたはぬ本願不思議を疑ふことが出来ないのである、否現に我等自力の立場を廻へして、佛智不思議の御はからひを仰ぎたてまつるばかりである、聖人が御消息に佛天のはからひにまかせたてまつるべしと仰せられたが是である、佛智不思議を信じたてまつる一念の信心より、自ら流れ来る大人生觀である。

○聖人は慈信房善慧が、關東に於て聖人の弟子信者に對して、異義をすゝめ多くの人々を熾惑したる場合に於ても、聖人は佛天の御はからひにまかせ候べしとのみ仰せられたのである、世は如何になりゆくとも我等を飽まで御見捨なき親心のましますとをいたゞきたる已上は、たとひ地獄の炎に焼かるゝとも、天地碎くるとあるも、更に悔しむ所はないのである。○嘗て私が或人と共に現代の事につきて對話しつゝあると

人が權化の仁齊しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲正しく逆謗闢提を惠まんと欲してなりと仰せらるゝが是である。

○已上此時局を奈何せんといふとは、單に時局に與り關する人のみではない、此際如何とすべからずと感ずる人は、皆同じく如來大悲の御惠をいたゞくばかりである、信仰問題の上より言へば一として他人のことではない、皆私自身のことである、此時局を他人のこのやうに思ふのが間違である、政治界にせよ、教育界にせよ、乃至宗教界にせよ、事功主義や、律法主義を以て如何とすべからざることを自覺すべき時が來りた、正に選擇本願が我等國民の上に再び新たに開くべき機縁あらはれた、本師源空世に出て、弘願の一乗ひろめつゝ、日本一州ごとく、淨土の機縁あらはれぬ、時正に來れり、各自大悲の弘誓を仰がねばならぬ、佛天はたしかに一大震雷を下して甘露法雨を注ぎたまふのである、佛智不思議の誓願を、聖德皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとくなり、聖德皇のおあはれみに、護持養育たへずして、如來二種の廻向に、すゝめいれしめおはします、然り如來二種の廻向に、すゝめいれしめおはします、往相廻向の大行大信、還相廻向の方便引入、人のためならず、聖人のたまはく、情

き、或人は現時日本國民の精神上の貧弱につきて、中心より深く感慨して、かくの如くして國民將來のゆくゑを察するに、亡國であると斷言して頗る悲觀の聲を放たれた、眞に痛嘆人の骨髓を穿つものであつた、私は唯々恐縮するのみでありました、されど私は決して悲觀するとはさらにないのである、何んとなれば他人のとてはない、何れの行も及びがたき地獄必定の私を、飽で見捨てたまはぬ親心にて在ます已上は、如何に精神的に貧弱であらうとも、御見捨なき佛智不思議を信じ奉れば、人世は如何に暗澹になりゆくと雖、更に悲觀することも失望することも全然無用であると申たとてあります、今時局に對して何等の策もなく、何等の術もなければ、佛智不思議まします已上は必ず心配するには及ばぬのであります、否此の如き時局のあらはれ來るのも、畢竟するに此如來の不思議、佛智の不思議をいたゞかねばならぬやうに導きて下さるのである。大聖の〴〵もろともに、凡愚底下のつみびとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり、前にも申したるが如く、是淨邦の縁熟したのである、淨業機縁はれたのである、今や正に淨土の教興らんとする時機純熟しつゝあるのである、我等は唯々大悲の深き思召を仰ぎたてまつるばかりである、聖

々彼を思ひ靜かに此を念ふに、達多闍世博く仁慈を施し、彌陀釋迦深く素懷を顯せりと、嗚呼一切有爲の衆生、煩惱具足の凡夫、未來の阿闍世王のために涅槃に入らずと宣ひし如來は永劫常住にましまして我等の上に在らせたまひ、此を去ること遠からずの聖訓は古今を選ばず、我等の上に被るのである、況んや佛滅後の衆生濁惡不善にして五苦に逼められんとは、實に正に其時である、其機である、定散自力のはからひで誤魔化し得べき時でない、盡十方無碍光の大慈大悲の名號と光明の父母我等を呼び、我等を攝取したまふのである、我等眞の佛子として不可思議の願海に歸入し奉るべきである、念佛成佛は眞宗を體得實現し奉らねばならず、往還廻向眞實の教行信證を獲得慶喜し奉るべきである、實に悲喜の涙に堪えぬ次第である。



『教行信證』信卷(菩提心釋より)

近角常觀

第二席 菩提心釋

一 凡夫と佛と連絡の問題

前席に續き、之より法然聖人の『選擇集』と、親慈聖人の『教行信證』と、互に趣きを異にし、而も同一信味をお知らせ下さる有難き處を話さうと思ひます。即ち平日話す、法然聖人選擇本願念佛の御教化に關し、上來話す菩提心の問題になるのであります。

法然聖人の『選擇集』は、阿彌陀佛が私共をお救ひ下さるにつき、如何なる行で助けんかと、衆生往生の行をお選び下された時、唯念佛の一行を以てと、第十八願念佛往生の願をお誓ひ下された事を、力強くお知らせ下された。こは平日雜誌に講話に、くどい程申して居る處であるも、猶ほ初めての方に一應申すれば、抑々私共が此の度び救はれて佛土に往く、此の佛と私共との間に連絡がつくことが宗教として最も肝腎の點であつて、廣き意味で總て宗教とは、凡夫の私と佛と連絡がつくことが、宗教であり、信仰であると言ひ得るのである。

。從つて其の連絡が如何につくかと實に大事の問題でありまして、凡そ有らゆる宗教、佛教は、斯く凡夫が佛も成るに如何なる連絡によるか、如何なる行によるかの問題となるのであります。

一 『選擇集』の教示と菩提心

そこで今阿彌陀佛が私共をお救ふが爲めに、有らゆる諸佛淨土の中より、選擇攝取して四十八願をたて、眞實佛土を建立して下された。といふのが中々分りにくいのであります。何うかといふに、佛が私共の悩み、缺陷を一々御覽下されて、其の悩み缺陷に對して、夫れが無い境界に到らしめ度いと、其の一々の悩み缺陷に對して、一々の遣る瀬無き大悲のお心を述べて下されたものが四十八願である。故に四十八願皆な遣る瀬無き大悲のお心に外無いのであります。而して斯く四十八願、何から何迄遣る瀬無くあるのであるが、其のやるせなき思召は、第十八願に於て、初めて私共と連絡がつくのである。故に宗教中の宗教、佛教中の佛教、他力中の他力なる眞の佛陀慈愛のお救ひが、私共に届いて下さる眞體は、此の第十八の念佛往生の願となるのである。而して其の十八願を佛が選ばせられた思召は、こは私が言うよりも『選擇集』の御文に明かである故に、如何に法然聖人の御教化が明了であるか。直ちに本文で頂かうと思ひます。『選擇集』本願章に、第十八念佛往生の願とは、彼の諸佛土中に於て、或は布施を以て往生の行と爲すの土有り。或は持戒を以て、往生の行と爲すの土有り。或は忍辱を以て往生の行と爲すの土有り。

り。或は精進を以て、往生の行と爲すの土有り。或は禪定を以て往生の行と爲すの土有り。或は般若を以て往生の行と爲すの土有り。或は菩提心を以て往生の行と爲すの土有り。或は六念を以て往生の行と爲すの土有り。或は持經を以て往生の行と爲すの土有り。或は持咒を以て往生の行と爲すの土有り。或は起立塔像飯食沙門及び孝養父母奉事師長等の種々の行を以て、各往生の行と爲すの國土等有り。或は専ら、其の國の佛名を稱するの土有り。此の如く一行を以て一佛土に配するは、是れ一往の義也。再往之を論ぜば、其の義不定なり。或は一佛土中、多行を以て往生の行と爲すの土有り。或は多佛土中、一行を以て通じて往生の行と爲すの土有り。是の如く往生の行種々不同にして、具に述べ可らざる也。

斯くの如く澤山ある行であるが、今阿彌陀佛は何う仕給ふたかといふに、

即ち今前の布施持戒乃至孝養父母等の諸行を選び捨て、專稱佛號を選び取る、故に選擇と云ふ也。

實にえらいお言葉である。前の布施持戒忍辱……乃至菩提心迄皆な選ひ捨て、唯専ら稱名の一行を選び取つて下された、といふのであります。而してこは何故かとあつて、以下叮嚀に、之には勝劣の義と難易義があると示されて、其の難易義の中のお言葉に、

故に知ぬ、念佛は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通せず。然れば則ち一切衆生をして、平等に往生せしめんが爲に、難を捨て易を取つて本願と爲す歟。若し

夫れ造像起塔を以て本願と爲さば、則ち貧窮困乏の類は、定めて往生の望みを絶たん。然るに富貴なる者は少く、貧賤の者は甚だ多し。若し夫れ智慧高才を以て本願と爲さば、愚鈍下智の者は定めて往生の望みを絶たん。然るに智慧ある者は少く、愚癡なる者は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願と爲さば、少聞少見の輩は、定めて往生の望みを絶たん。然るに多聞の者は少く、少聞の者は甚だ多し。若し持戒持律を以て本願と爲さば、破戒無戒の人は、定めて往生の望みを絶たん。然るに持戒の者は少く、破戒の者は甚だ多し。自餘の諸行之に準じて應に知るべし。當に知るべし、上の諸行等を以て本願と爲さば、往生を得る者は少なく往生せざる者は多からん。然れば則ち彌陀如來法藏比丘の昔、平等の慈悲に催されて、普く一切を攝せんが爲に、造像起塔等の諸行を以て、往生の本願と爲さず、唯稱名念佛の一行を以て其の本願と爲す也。故に法照禪師の五會法事談に云はく、彼佛因中立弘誓、聞名念我總迎來、不簡貧窮將富貴、不簡下智與高才、不簡多聞持淨戒、不簡簡破戒罪根深、但使迴心多念佛、能令瓦礫變成金。云云。と、實に斯くの如くあるのである。即ち破戒無戒、愚癡無智、貧窮困乏、有らゆる一切の衆生を救はんが爲めに一向に専ら無量壽佛の名號を稱へる一心專念彌陀名號をとつて下されたといふのである。既に專稱といふ、他のことがある位ならば專とは仰せられぬのである。我々菩提心が出来る程ならば專とは仰せられぬのであるも、專とあるを見ると、我々菩提心も起らず、座禪戒行も出来ねば、孝養父母奉事師長も出来ぬ、

其の總てが出来ざる一切の衆生を助けるが、實に第十八願念佛往生の願の思召である、と之が實に法然聖人『選擇集』の大事の處なのであります。て之が當時の佛教界に大影響を與へて、樹尾の明惠上人は「菩提心を捨てなると、そんなものは佛教で無い、外道の教である、苟も佛教ならば、菩提心が無いなどと、そんな事が有る可きで無いこと、ひどく非難せられた。處が法然聖人は、『大無量壽經』の上に、

無上菩提の心を發して、一向に意を專にして、乃至十念無量壽佛を念じて、其の國に生れんと願す。

と、斯く明に「菩提心を發して」とあるを「一向に専ら」だけ取つて上の菩提心は捨て、仕舞ひ、彌陀の本願には菩提心は無いと、著しくお知らせ下されたのである。爲に當時の佛教界から大反抗に遭ひ、流罪になり給ひたも、一に此の菩提心及び戒律等を否定し給ひたによるのである。當時の佛教として同じ一佛の教を奉ずる佛の遺弟として、發心の慧明たる戒律や、菩提心を捨てる如き、そんなものは佛故で無い、となるのである。こは大に味ひ深き、有難き處なのであります。

三 得度しつ迄も得られぬ

そこで之をいづもの如く、信仰の實際の味ひより話させて頂かうと思ふ。幸ひ之に大和より御上京の大原老人がお出になる。此の方の御安心なされた筋路に思ひ當る故、之を言ふと（求道昨年度第六號參照）一昨春御遠慮で京都に參つた御これなる御老人が兼ねてより法に御志篤く、門徒教導をなされてあつたのであるけれども、其の中或は母御が亡くなられ

りが出て來やう筈が無い。故に凡夫の菩提心では、何程力まうが、終に駄目だと仰せあるのであります。

四 淨土の大菩提心

サアすれば、斯くの如き我々は、最早やこれ仕舞ひかといふに、佛かねて煩惱具足の凡夫と知召し下されたといふが茲である。佛かねて私共か斯の暗黒一點の光りなき地獄一定の身なる事を、五劫の昔に既に取つて下され、此方より菩提心を振立て、何程佛に向うても、我々の菩提心では駄目である。況んや其の佛に向ふ心すら起ら無い。我々の向ふといつて居るのは、實は自分の苦を取り度い／＼で佛のお力を利用仕やうと仕て居るのである。既に斯くの如き仕方の無い自分であると仕て見れば、實に今日迄能く此の座で居つた床が落ちなんだの思ひで、今迄は大丈夫と綱を握つて居る積りで居つたのであるけれども、其の此方から求める菩提心の綱も斯く當てにならぬと仕て見ると、さあ我々は何うするかの問題である。茲になると、我々は最早や落ちるより外に仕方が無い。實に鐵橋のレールの端に立ち枕木の間より蒼々したる水を眺め、今や落ちんとする危うき様である。和讃には

三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、

大菩提心おこせとも、自力かなはて流轉せり。

我々長い間既にこの菩提心でやつて失策て來たのである。況や今日では其の自力の菩提心も立て通す事が出来ない。實にふと目を醒まして見廻せば、危うき鐵橋の枕木の間より水を眺め、今や落ちる恐ろしき様に在るのであります。

御子さんが亡くなられ、又御夫人が亡くなられ、頻りに不幸が續いて出た。さて自分とは氣が就いて見ると、行く先きは全く闇みにて一點の明るみも無い、爲めに大に苦勞せられたのである。それで何とかして安心を得度いと、手に常に聖教を離さず、口に常に念佛を稱えて久しき間一心不亂にやられたのであるけれど、何うしても眞實の安心が得られぬ。常に人に法を説き讀經する身が自分自身に安心が出来ぬと、遂に

仕方なく、老體の身に且つは出にくい中を、態々聞法の爲め東京に來ると、度々私の許に手紙をよこされたのである。で私は其の時來る四月には京都に行くからと、四月參つて京都でお目にかゝり、初めてお慈悲を頂いて下されたのであります。て此の御老人にしても、今死ぬとなると先きは眞つぐらがりにて一點の明るみも見えぬ、佛のお助けは今迄聞き飽く程聞いて居るも、いざとなると何程聖教を繰り反しても安心の道が見つからぬ。サア之ではならぬと、人生の無常なる事實に出くはして厭離穢土の心を發し、何とか仕て安心仕なければならぬと、菩提心を起して求められたのであるけれども、夫れでは終に安心が出来なかつたのである。又皆さんが、茲は求道學舎である、行きて求めたら得られやうと、或は遠國より來り、又は斯く集つてお求めになる。夫れが皆な其の求める／＼で、何時迄も得られず、困つてお出になるのである。で今法然聖人の仰せられる、此方より求める菩提心ではいかぬとあるが茲である。如何に身心を苦しめ、眼より涙を流して求めても、其の此方より求めることでは永却に不可である。何程心を引き諦め、氣を勞しても本來闇みばかりの私から光

さてすると、今佛の五劫思惟の本願とは何であるか。私共が其の菩提心も駄目なる此の危うき様を意外にも御覽下さる人ありて、成る程汝は菩提心も駄目だらう、彌々落ちると思へば、唯恐ろしいばかりだらう、其のお前の落ちるのが哀れてある、仕て見やう無いのが可哀相である」と、私の其の菩提心さへ間に合はぬ様を哀れみ下され、況んや起立塔像、座禪戒行、何一つ私共は力及ばぬ、其の力及ばぬ仕て見やう無いのが可哀相で、其の者が捨てられぬとあるが實に佛の大悲の呼聲にて、其のお心が其の儘表はれて、其の菩提心も及ばぬ者の爲めに選擇攝取して佛の方より與へて下されたが、南無阿彌陀佛の一行である。故に我々自分の方よりは斯く菩提心も起らぬ、厭離穢土欣求淨土の心も無い、其のお慈悲に脊を向けて遁げ通す、其の遁ぐる者を飽く迄追ひ捕えて、遣る瀬無く言ひ聞かすが南無阿彌陀佛の一言であるぞと、之が法然聖人『選擇集』の御教化の要旨であります。て若し茲で法然聖人が、斯く菩提心では駄目であると、捨てて下さらぬと、我々は其のあかぬ菩提心でも振立て、自分の方から向はんならぬとなる。處が昨年度講義にも申した如く、眞實に二種あつて、一つには自利眞實、二つには利他眞實である。其の自利眞實に又二種あつて、厭離眞實と欣求眞實である。處が今言ふ如く、其の厭離穢土欣求淨土の自力の菩提心では、我々は到底往かれぬ爲めに、其の者の爲めに思ひがけ無く廣大の大悲が現はれて、茲に意外にも利他眞實といふ大事件が起つて來たのである。て其の如來の利他の思召は、我々が斯く厭離眞實も欣求真實も無い夫れに、向ふ様のお慈悲一つで届け助けや

うとある、實に意外なる廣大な哀れみであるのである。故に我々成る程斯の如き廣大な御哀みと此の御親切一つに氣づかせて貰ふと、茲に思はざる淨土の大菩提心が頂けると、斯ふいふ事になるのであります。

五 法然聖人と親鸞聖人の違い

さて茲で親鸞聖人と法然聖人の違い目が出て来るのである。何うかといふに、法然聖人の示され方は常に消極で、今の如く「菩提心も戒行も何も無い、唯南無阿彌陀佛一つだ」とお知らせ下さるが、法然聖人の御教化である。これは聖人の御咏にも

阿彌陀佛といふよりほかは津の國の

難波のことあしかりぬべし。

總ての斯の如き具合で、一切經を六度迄讀まれた聖人の『選擇集』にしても、他の經文は一つも引いてお出でに無い。引いてお出でになるは唯淨土の三部經と、七祖丈けなのである。而も其中でも、殊に善導一師によるといふのが、聖人の賜なのである。凡て此の調子で、「今日より見ると、法然聖人は大様で寛大である。親鸞聖人は嚴格で、キチ／＼居られる」と、誰しも然う言うて居るのである、夫れには違はぬも、斯く法然聖人は此の點何處迄も嚴重で、一步も許されて無いのである。我々は親鸞聖人の『歎異鈔』の

親鸞は父母孝養のためとて、念佛一邊にても申したることいまださふらはず。
の御教化を見て、其の著しきに驚いて居るのであるが、之と

譬へば世間の屋舎なる名字中には、棟梁椽柱等一切の家具を攝す。棟梁等の一々の各字の中には、一切を攝する能はざるが如し。應に知るべし、然れば則ち佛の名號の功德、餘の一切功德に勝るが故に、劣を捨て勝を取り、以て本願と爲す歟。

と仰せられあつて、家といへば既に其中に、棟、梁、椽、柱等も有らゆる家具が何もかも皆な這入つて居るのである。其の如く一南無阿彌陀佛の中には、有らゆる萬德が皆な籠つてあると言はれてあるのである。之は御同やう、上述の如くて自分の父母孝養は出来ぬ、自分の菩提心は仕やうが無い。去りながら、其の有らゆるものを皆な捨て、唯南無阿彌陀佛一つと、之が頂かせ貰へた時には、不思議なる哉自ら計はざるに其の御見捨てなき慈悲が有難いといふ願作佛の心が起り、又之を頂くなり此の慈悲を誰にも彼れにも知らせ度いといふ度衆生の心も起つて来るのである。即ち此の願作佛心度衆生心が、淨土の大菩提心であると、お知らせ下さるのである。

して見ると法然聖人は、菩提心其他一切が無い／＼と、皆なはねのけて、其の者の爲めに唯南無阿彌陀佛の一法であると、お知らせ下さるのであるが、親鸞聖人は、其の南無阿彌陀佛の一つを頂くと、其中に其の菩提心はじめ何もかも皆な具はつてあると、御知らせ下さるのである。これは聖人が『和讃』にも、

淨土の大菩提心は、願作佛心をすゝめしむ、
すなはち願作佛心を、度衆生心となづけたり。
度衆生心といふことは、彌陀智願の廻向なり、

て先き言ふ『選擇集』に、既にちやんと孝養父母奉事師長は捨て、仕舞うてあるのである。總て斯く皆な捨て、其の何れの道も及ばぬ其者を捨てさせ給はぬが南無阿彌陀佛の恵みであると、茲をお知らせ下されたが法然聖人の御教化なのであります。處が親鸞聖人は、其の法然聖人の南無阿彌陀佛一つの御教化を頂けば、

親鸞においては、唯念佛して彌陀に助けられ参らすべしとよきひとのおほせをかうふりて、信するほかに別の仔細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。

其の南無阿彌陀佛は善きことか悪しきことか、果して極樂往生の種であるやら、地獄行き業であるやら、そんな事は親鸞に於ては更に知らぬ。知らぬが斯く何れの行も及ばざる地獄一定の親鸞を、捨てさせ給はぬ南無阿彌陀佛の哀れみと、之をとつくり頂いて見ると、今度は此の南無阿彌陀佛一つの中に、不思議なる哉有らゆる總ての物柄が、皆な籠つてあるとお知らせ下されたのである。之は既に法然聖人も先きの『選擇集』本願章勝劣義を指示下さる文に、

初めに勝劣とは、念佛は是れ勝れ、餘行は是れ劣れり。所以はいかん。名號は是れ萬德の歸する所なり。然れば則ち彌陀一佛所有の四智三身十力四無畏等の一切内證の功德、相好光明說法利生等の一切外用の功德、皆な悉く阿彌陀佛の名號の中に攝在せり。故に名號の功德最も勝れたりと爲す。餘行は然らず、各一隅を守る。是れを以て劣と爲る也。

廻向の信樂うるひとは、大般涅槃をさとるなり。斯く法然聖人は消極的に在る處を、積極的にお知らせ下されたが親鸞聖人である。而して之れが何うなるかといふに、法然聖人の如く、總てが間に合はぬ處で南無阿彌陀佛の廣大の恵みが現はれ、夫れを頂く一つで今度は意外にも、其の一つから何もかも皆な出て来るとなるのである。聖人は又此の事を『行卷』の劈頭に仰せられ、

謹んで往相の廻向を按ずるに、大行有り、大信有り。大行とは則ち無碍光如來の名を稱するなり。斯の行は即ち是れ諸の善法を攝し、諸の徳本を具せり。極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり。故に大行と名く。
と。斯く南無阿彌陀佛の恵み一つより、淨土の大菩提心が現はれ、又孝養父母奉事師長等此の世の仁義禮智信が皆な現はれて来る、とてあります。

六 念佛は無碍の一道

そこで『歎異鈔』で「親鸞は父母孝養のためにとて、念佛一偏にても申したることいまだ候はず」と言はれた親鸞聖人が『御消息集』に於て、

朝家の御ため國民のために、念佛まふしあはせたまひさふらは、めてたふさふらべし。云々。

と言はれた、之が少しも矛盾が無いのである。何うかといふに、既に自分の力では斯く自分さへ救はれぬ我々である。況んや此の如き分際で人が何う斯う出来やうか。人の爲め、父母孝養の爲め念佛するなど、實にをこがましき申譯なき言ひ分て

あるとなるのである。去りながら
そのゆへは一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟な
り。いづれもこの順次生に佛になりて、たすけさふら
べきなり。わがちからにてはげむ善にてもさふらはむこそ
念佛を廻向して、父母をもたすけさふらはめ。たゞ自力を
すて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあ
ひだ、いづれの業苦しづめりとも、神通方便をもて、ま
づ有縁を度すべきなり。

斯く自分の方よりは父母孝養の爲め、廻向の念佛とては偏
にても稱へられぬが、其の者をお見捨てなき此の南無阿彌陀
佛一つを頂くと、夫れより此度びは有りとする萬徳が現はれ
來り、朝家國民を護持養育の廣大なる力も、此の念佛一つに
あるとなる。故に朝家の御ため國民の爲めにも、先づ此念佛
一つを頂き、申し合はせ給ひ候は、目出度く候べし。之が聖人
のお知らせ下さる如來廻向の浄土の大菩提心の味ひである。

そこで此の度びは、聖人の『教行信證』は書き方からが、先き
言ふ如く『選擇集』には浄土の三部經と七祖丈けしか引かれて
無いに、『教行信證』には三經七祖は勿論の事、『華嚴經』『涅槃
經』其外有らゆる經文釋文が、皆な引かれてあるのである。之
が何かといふに、斯の如き廣大の南無阿彌陀佛を頂き來ると
『華嚴經』『涅槃經』を始め、釋尊一代の教説は、皆な此の一南
無阿彌陀佛の廣大な佛の哀はれみとお知らせ下さる外無いと
なるのである。斯くの如く、一南無阿彌陀佛のやるせなき思
召を頂いて、それから現はれ來る廣大のお恵みを何處迄も積
極的に知らせ下されたが、聖人御一代の御苦勞なのであり

ます。
さて之を御同やうの上に頂き來りて、何ういふことかとい
ふに、之が決して書物の上の筋道や、法文の扱ひ汰沙ては無
いのである。何うかといふに私共が今日此の世にありて此の
體たらく、或は自分の健康、財産を頼み、位置名譽を思ひ
又は父母妻子を當てにして、夫れて夫れが間に合ふかといふ
に、彌々となると有りとする物、親でも子でも、妻でも夫で
も何の役にも立たぬのである。すると然ういふ人生に安心の
道の絶え果てた仕て見やうの無い身。夫れに對して茲に意外
にも然ういふ者であるを兼ねて心配して、其者が「唯念佛し
て彌陀に助けられ參らすべし」と、其者の爲に兼ねて用意して
待ち受くる本願念佛の恵みであるぞとある御呼び聲である。
すると私共、此世の一切は何もかも皆な佛の恵みであると、
初めから此の世がよくなりて頂く慈悲ぢや無い。が「斯くの
如く自分のやうに喜べぬ者、彌々死ぬとなれば心淋しくてな
らぬ者、如何にして善心が起らず、悪心の止まぬ者」夫れを
先きの先き迄見通して、其者が可哀相故飽く迄捨てぬとの思
召の塊りが此の南無阿彌陀佛と、私共を一つ頂く一念には、
其の一念に何時死しても浄土往生が出来る利益ばかりか、現
に斯く仕て見やう無き人生に、此の度びは安じて處して行け
る力迄を賜はるのである。て此の廣大の恵みよりいふと、私
共が此の淺はかなる世の中に、露の命をつなぐ、これ迄が皆
な廣大の賜物にて、日々の日暮しをさせて貰うて居るに外な
らぬのである。手近く言へば、今度求道會を開いて斯く皆様
が熱心に聞きに來て下さる。私の方で皆様に聞いて貰はふと

なるのも皆様の方で聞かうと來て下さるも、不知不識の間に
廣大の御計ひにて、斯くある可らざる處に、思ひがけなく熱
心に聞きにお出で下さるのである。即ち之が不思議の無碍の
一道である。聖人は『歎異鈔』に

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信
心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙するこ
となし。罪惡も業報も感ずることあたはず、諸善もあよぶ
ことなきゆへに、無碍の一道なりと云々。

遂に聖人は、天神地祇迄が、念佛の者を護持養育するとお知
らせ下された。併し茲で、夫れだから天神地祇を拜するとな
ると、忽ち外道に陥入るのである。處が斯く南無阿彌陀佛一
つを頂けば、此方より求めざれども、

心だにまことの道にかなひなば
祈らずとも神やまもらん。

茲を頂くて無ければ、横超他力の恵みとはならぬのである。
私其の方より個々に佛を認めて、佛の力によるは、私共には
力及ばぬ夫れは彌勒菩薩の仕事である。去りながら親鸞聖人
は、前席の如く便同彌勒と示し下され、彌勒菩薩が五十六
億七千萬年の後に、成佛出世して釋尊の跡をつぎ化を施して
下さる。我々は夫れと同じき仕合せを真心徹到の一念に得さ
せて貰うのだと、お知らせ下された。『和讃』に

真心徹到するひとは、
金剛心なりければ、

三品の懺悔するひと、
ひとしと宗師はときたまふ。
前席に此の横の浄土の大菩提心を、横超の金剛心と名くると
仰せられたは、斯く如來の真心が徹到し、如來の心が貰はれ

た心であるが故に、實に金剛心である。金剛心は夫れ故、此
の大悲徹底の横超の恵みで無ければ、言はれぬのであります。
又聖人は『正信偈』に於て
行者正しく金剛心を受け、慶喜一念相應の後、
草提と等しく三忍を獲、即ち法住の常業を證す。
と仰せられてあります。

七 入眞爲正要

そこで前席の文に續き
『横堅の菩提心其の言一にして其の心異なりと雖、入眞を正
要と爲し、眞心を根本とす。邪雜を錯とし、疑情を失と爲
す也』。

斯くの如く横超浄土の大菩提心は、他の自力の菩提心とは事
變はり、如來の眞に私共仕て見やうなきを悲憐して下さる、
如來の眞の思召が私の心中に徹到して下されたが横超の菩提
心である。夫れ故堅出堅超、横出横超と、一口に菩提心の名
は一つであるけれども、能く如來の思召を味ひて、如來の眞
の思召に入る入眞を正要と爲し、眞心を根本と仕なければな
らぬ。眞心は即ち佛の眞實心である。佛の眞實心を根本とす
る横超他力の菩提心で無ければならぬとであります。『邪雜を
錯とし』は、邪雜は即ち解行不同の邪雜人の邪雜であつて、此
の佛の眞の思召を頂かぬ、入眞の反對が邪雜である。即ち佛
の眞のお心を頂かぬもの故、何時迄も自力の菩提心に執し、
雜善雜行の道に止まつて永劫に夜の明けることが無い。即ち
之を錯と言つて、「あやまり」とし、又疑情は眞心の反對であ

つて、其のお慈悲が胸に徹せぬは、何時迄も自分の疑情に係つて、夫れに執して居るからである。夫れ故夫を失と言つて其の爲めに往生の大益を失するぞと。こは何氣無きお言葉のやうなれども、世間に邪雜疑情に止つて、眞の如來の思召を聞かうと仕無い者が澤山ある。夫が聖人にする時は、哀はれて黙して居られぬのである。輕卒に讀み流してはならぬのであります。それ故次に

『欣求淨刹の道俗、深く信不具足の金言を了知して、永く聞不具足の邪心を離るべき也』。

欣求淨刹の道俗は、往生を願ふ道俗である。信不具足の金言は、昨年度の處に『涅槃經』の文を引かせられて、信に復二種有り。一つには聞より生ず。二つには思より生ず。是の人の信心は聞よりして生じて、思より生ぜず。是の故に名けて信不具足と爲す。復二種有り、一つには道有りと思はれて、二つには得道を信ず。是の人の信心は唯道有りと思はれて、都て得道の人有りと信ぜず。是を名けて信不具足と爲す。

と、之を仰せられたのである。即ち唯耳に佛の慈悲を聞いた丈けにて、心に眞に思はぬ者は、未だ遣る瀨無き思召が徹到せぬ者にて、信不具足である。又、成る程確に道はあると思はれても唯夫れ丈けでは駄目であるが、處が明に其の道を得て正覺をなし、我々を哀はれんで下さる佛が有ることを信じ、又其の哀れみを現に頂いて、我々に知らせて下さる善知識有ることを信ずる、之が得道の人有りと信ずるのである。處が自力聖道は、其の道が有ると丈けは思ふて居つても、其の得

道の人有りて遣る瀨無く私に向はせられてある事を信ぜぬ。又他力を聞いて居る者でも、唯然ら耳に聞いて居る丈けのことに止り、又皆な合ひの事のやうに、大よそに聞いてしまつて、眞實如來の大慈に夜の明けぬ者は、皆な此の信不具足の仲間である。故に眞實淨土を願ふ道俗は、能く此の信不具足のお言葉も各自に頂いて、『永く聞不具足の邪心を離る可き也』之は今年度講本後段に引用して出でたる、矢張り『涅槃經』の御文を仰せられたのであります。

涅槃經に言まはく。云何が名て聞不具足と爲す。如來の所説は十二部經なり。唯六部を信じて、未だ六部を信ぜず。是の故に名けて聞不具足と爲す。復是の六部の經を受持すと雖、讀誦に能はず、他の爲に解説するは、利益する所無けむ。是の故に名て聞不具足と爲す。又復是の六部の經を受け已つて、論議の爲めの故に、勝他の爲めの故に、利養の爲めの故に、諸有の爲めの故に、持讀誦説せむ。是の故に名けて聞不具足と爲すとのたまへり。

即ち如來の所説十二部經の中、半分丈け信じて、半分は信じ無い者は本物で無い、故に之を聞不具足と名ける。又設へ其の半分を頂いても、夫れが如何にも思召の有難い爲め、頂かずに居れなくて、頂いたのでなくて、他の爲に解説する目的や、論議の爲め、勝他の爲め、利養の爲め、其他有らゆる目的の爲め頂いたのなら、未だ本當にお慈悲に頭が下りたので無い。故に之を聞不具足と名けると。即ち皆んなが然ういふ論議、勝他、利養、講説等が、いつの間にか主になつて、あれが悪い、之がよいと、是非善惡に暮して居るは、佛が然

ういふ者を遣る瀨無く思召す佛の眞實心を頂かぬ聞不具足に墮して居るからである、故に入らざる詮議をせんよりは、早く信不具足の御誠めに氣をつけて、横超他力の眞の佛の御意を頂き、聞不具足の邪心を離れよとである。茲は然ういふ者に對する如何にも遣る瀨無き涙の籠つた聖人の御言葉である。殊に此の一段はお言葉の具合と謂ひ、前後の關係といひ、深き／＼思召が存する處と頂かるゝのであります。

八 『論註』の文

さて之よりは『論註』の文を擧げさせられ、

論註曰。按王舍城所説無量壽經、三輩生中雖行有優劣、莫不發皆無上菩提心之心。此無上菩提心、即是願作佛心。願作佛心、即是度衆生心。度衆生心、即是攝取衆生。生有佛國土心。是故願生彼安樂淨土者、要發無上菩提心也。若人不發無上菩提心、但聞彼國土受樂無間、爲樂故願生、亦當不得往生也。是故言不求自身住持之樂、欲拔一切衆生苦故、住持樂者、謂彼安樂淨土爲阿彌陀如來本願力之所住持、受樂無間也。凡釋迴向名義、謂以己所集一切功德、施與一切衆生、共向佛道。抄出

こは上述の如來迴向の淨土の大菩提心を、聖人が喜ばれた

其の據所とも言ふべき『論註』の文を指示下されたのである。王舍城所説の無量壽經は言ふ迄もなく『大經』である。『大經』下巻初の説法を頂くと、御承知の如く上中下三輩の往生が説かれてあつて、夫れを見るに成る程行に於ては三輩の區別に従つて、夫れ／＼優劣が説かれてある。が結局三輩とも皆無上菩提心を發して往生するに非ざるは無いとである。而して茲の無上菩提心が、即ち淨土の大菩提心であるとの意でありませぬ。處て茲の三輩生の文にしても、又『觀經』の三福九品にしても、讀みやうによつては衆生の根機に従つて、往生の行にも夫れ／＼優劣があるとの意味にも取れるのである。即ち其の意味に取る時は三輩生でも三福九品でも皆な自力になる。處が聖人は『和讃』に、

如來清淨本願の、無生の生なりければ、本則三三の品なれど、一二もかはることぞなき。

即ち衆生の機類に於ては様々あつて、夫れより言ふ時は行に勝劣が出来て來るのであるけれども、夫れが平等に如來のお慈悲を頂くとなると、夫れが皆な一味になつて任舞ふのである。即ち茲にお出で下さる皆様にしても、學問、經歷、貧富、老幼、男女、人生的の區別より言ふ時は、百人百色で、此の點より言ふ時は、實に三輩九品の區別がある。が今共に同一廣大のお慈悲を頂かせ貰うとなると、先きの『選擇集』中にある法照禪師の「貧窮と將富貴とを簡はず、下智と高才とを簡はず、多聞と淨戒を持てるとを簡はず、破戒と罪根の深さとを簡はず、但廻心して多く念佛せしむれば、能く瓦礫を變じて金と成らしむ」の文通り、夫れ迄は勝劣の區別があるので

あるも、其の悲見捨てなき慈悲頂いた上からは、皆な同一鹹味の遣る瀨無き慈悲ばかりになつて仕舞ふのである。即ち法然聖人が菩提心を捨てるとお知らせ下されたは、其の前の勝劣の別ある自力の意味にて、言はれたのである。處が親鸞聖人は斯く其の者が悲見捨て無き眞實一つを頂き来る時は、其上より今度は淨土の大菩提心があると告示下されたのであります。

そこで今の御文にしても、此の淨土の大菩提心の意味にて頂き「大經の三輩生の文で頂いても、成る程行に於ては優劣が言はれてあるが、要するに三輩とも廣大の御眞實を頂き無上菩提心を開發せぬ者は無し」とである。こは「大經」の本文を頂くと御存知の通り三輩とも、皆な發無上菩提心がついで居無いのは無いのである。而して「此の無上菩提心は、即ち是れ願作佛心なり。願作佛心は即ち是れ度衆生心なり」此の即是れが有難いのである。何うかと言ふに、其の無上菩提心を頂くと、夫れより願作佛心が現はれ、度衆生心が出て来るのならば「即ち是れ」で無い。處が悲見捨ての無い御眞實が有難やと頂いた夫れが直ぐ大菩提心であり、願作佛心であり、度衆生心であるが故に、「即ち是れ」なのである。茲は「救異鈔」にも、

慈悲に聖道淨土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐむなり。しかれどもおもふかごとくたすけとぐることはめてありがたし。また淨土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて、大慈大悲心をもておもふかごとく、衆生を利益するをいふべきなり。

今生に、いかにいとをし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがなければ、この慈悲始終なし。しかれば念佛まうすのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にてはさふらふべきと。云々。

即ち「念佛申すのみぞ」夫れが直ぐに「すゑとほりたる大慈悲心にては候べき」なのである。念佛申すと夫れから佛になりて人を助ける度衆生心が出て来るのならば、「念佛申すのみぞ未通りたる大慈悲心」では無い。之が私共遣る瀨無き念佛一つを頂くと、夫れに一切衆生を助ける度衆生心迄籠つてある味ひなのであります。すれば頂いた者は唯自分丈けひとり有難がつて居る丈けかといふに、其の廣大な度衆生心迄が頂けるも故、今度は信徳として其の恵みを人に言ひ知らさずには居れ無くなる。去りながら其の人に言ひ聞かす心が度衆生心では無くして、其の大もとは悲見捨て無き佛の眞實一つを頂いた處に、早や既に廣大の度衆生心、願作佛心が具はりて居るのである。故に「度衆生心は即ち是れ衆生を攝取して、有佛の國土に生ぜしむる心なり」其頂く處の度衆生心は、衆生を哀れみて廣大の淨土に生れしめ下さる廣大のお心だとしてあります。さて斯く廣大の願作佛心、度衆生心の大菩提心故、彼の阿彌陀佛の安樂淨土に生れんと樂ふ者は、要す此の大菩提心を頂きて參らせて貰ふとである。此の菩提心でなくては參らせて貰へぬとであります。夫れ故若し人此の無上菩提心を頂くと、唯彼の佛國の受樂暇なきを聞きて、其の仕合せを得度いばかりで、往生を求めたのでは、自力の菩提心であるが故に、到底參れ無い。何故ならばもとゞ彼の佛國

告白

信仰近信二章

一

は、佛が私可哀いばかりで御成就下された國である。故に「言ふことろは、自身住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲ふが故にと」即ち本來彼の佛國は、大悲の阿彌陀佛が自分の樂みといふものは一切思はず、唯一切衆生の苦を助け度い計りの佛の度衆生心願作佛心一つで出来上つた國である。故に其の廣大な思召を難有いと頂く淨土の菩提心で無くては參れぬと。斯く本來は衆生につく可き願作佛心度衆生心の言を、凡て方角を逆にして、佛に持つて行き、告示下さるが聖人の讀み方であります。而して其住持樂とは、謂く、彼の安樂淨土は阿彌陀如來の本願力の爲に住持せられて、受樂間無きなり。其の極樂淨土の樂しいのは、私が可哀ばかりに阿彌陀佛がやるせなき願力一つで住持して下さるのである。即ち彼の七寶樹林も、八功德水も、皆な私が哀はれ心の一心から、大悲の親様が成就しとして下さるにあらざるは無いのである。猶ほ聖人は次の廻向釋をも一緒に引き下され、「凡そ廻向の名義を釋せば、……共に佛道に向はしめたまふなり」

即ち前席に言ふ如く、元來は行者の廻向の意味であることを如來に持つて来て、如來が身口意の三業に集め給ふ一切の功德を擧げて、私共一切衆生に届け施與し、私共を廣大の慈悲に向はしめて下さるが、廻向の意味であるとお知らせ下さるのである。是れ即ち前席の御文に「横超とは斯れ乃ち願力廻向の信樂なり」とある、其の願力廻向の廻向の名義を御知らせ下さるものにして、聖人の喜び給ふ他力眞宗の根本は、實に此の如來廻向一つに極まるのである。此の如來廻向なる思ひがけも恵みが現はれて来る處で、初めて他力眞宗はあるのであります。已上。(第三回夏季求道會第一日第三席)

此度は我ながら意外にも御慈悲に夜を明けさして頂き、先づ第一番に御禮申上候。此度は神經衰弱にて上京御宿を頂き、別に熱心に信仰を求めると云ふ次第にても無之候處、兩三度の御講話を拜聴するにつれて、何だか急に先生に御聴き申度き氣になり、佛間に於ける質問に對する御教示を受けてよりいや増しに其念高じ、夜大阪の方々御歸へりの後、私の質問連發に對して只一つの御説明なく、侃々嘯々、徹題徹尾否定被遊、數年の間研究に研究し、實とも頼み玉手箱とも信じ居りし念佛、信心、極樂といふことを皆取り上げられ候事故、實に「こんな困り果て候事無之候。翌日は商人の方の著しき様子を見て一方ならず胸打たれ、其の際先生私の求むる方向を御批評して曰く、一體君の見當は根本から間違つて居る、例へば口元へ持つて行くべき湯飲み茶碗を、耳の穴の所へ持つて行くようなものだ」と仰せられながら、其の眞似をなして示され候時、成程それは今の今まで力みに力みし私の豫想は全く御間違であつたかと思ふなり、無性に難有、今の今まで空つばだと思ひ居りし先生の可愛想でならぬと云ふ思召

が、恰かも海綿に水がしみ込む如くジウウ〜と難有身にしみ候。君の求むる念佛、信心、極樂は結果論也、根本に目が暗んで枝葉に走る、安んぞ御慈悲を頂けんやとの先生の御叱り、今こそ徹底して相分り申候。先生が私を警めらるゝ結果論を、私は數年の間根本也源泉也と信じて頑張りしこと、御恥かしき次第に御座候。たま〜行信を得ば遠く宿縁を喜べ。嗚呼實に遠き宿縁、御手間を取らせたる荷厄介者にて候。長の間如來様並びに先生に御苦勞懸け候事、誠に〜御申譯無之候。只この上は大慈悲の親様の御ふところの中に念佛申さして頂くべく候。

五月二十九日

宮澤 磯 吉

二

拜啓

永々御無沙汰仕り候。先生には益々傳道御精勵の御ん事と遙に御なつかしく忝けなく存じ居り候。先日御病後の御述懐を御聴聞仕り、日夜教人信の一事に心身をお棄てなされ、時刻の遷り行くをすら御忘れの御起居を御うかがひ申し候て、永々御苦勞も掛け申せし吾が身の罪深き御慈悲のありがたさに強く心を撃たれ申候ひき。佛恩報謝の經營に刻々の全精力を注いで結果の如何をかへり見ぬ信後の生活を御知らせにあげばかり、行く手の指針いよいよ明了に相成候。

生來內的外的に多くの問題を荷ひ居り、したがつて人生の缺陷に歩み煩ひ居り候ひし窮人愚生には、恩寵のありがたさ言ひつくしがたく候。たとひ火の中水の中なりとも打ちすぎ御聞き申すべき救済の御聲を、しかも僅かの間に御聞き申

講話

諸の如來と等し

(第二回慶信會講話)

近角 常 觀

傳道所感

一 本日は第二回の慶信會である。私は先月二十二日以来福岡地方及び郷里に参り、昨日歸つて來たのであります。
二 今度の傳道に於ては、何れかと言へば、新たなる人よりも、從來有縁の人が信仰に入り、信仰に入つた上にも徹底し、又從來喜んで下された人も、諸種の經驗により更に喜びを深めて下された事が多かつた。勿論大分縣の如きは土地の寺院で、大分市から三里程這入つた松岡村といふ、嘗つて當地の大學に居られた相馬氏の寺である。今度聖人の御遠思を營まるゝに就け、前方より信仰を引き立て、置き度いと催促しにて、三日間行き、話すと、皆んなが力を入れて聞いて下された。斯く多くの人に對し、話した場合もあつたのである。一々事柄を言へば切り無きも、引きくるめて信心上の味ひを、喜ばして頂き度いと思ひます。

與諸如來等

三 今日の話は、慶信會に因みて、『華嚴經』の此の法を聞いて信心歡喜して疑ひ無き者は、速に無上道を

したる事、一つは深重なる久遠劫來の宿縁の御導きにより、一つは先生の厚き御恩によるものと喜び居り候。

光明と名號とに護持養育せられまゐらせて、遂に宏大無邊なる御力の下に歸命依頼し奉り、周圍の萬物に喰つてかゝり居り候ひし疑惑の心、隔て心も、高大の眞實心に打ちまかされて頼に根絶し申し、今更に温き光明と名號の御船に乘托して渡りがたき善惡の海を、凝滞なく通らせていたたく事、誠に世にもならぶものなき佛法不思議と折りにふれ感謝仕り候。僅かなる一擧手一投足に至るまで理想と現實との破綻にはさまれて行きづまり居り候を、今は早や善も欲しからず惡も恐れなく、いづれもいづれも單へに業報にさしまかせ居り候。臨終の問題まで此の通りにといていたたく事にて、まことに一切無礙のありさまに候。天にも地にも唯一つのすみかは念佛に候。唯一つの命は念佛に候。此の一事のみは、生來無言無筆の愚生も、書き書きて猶書き足らず、言ひ言ひて猶言ひつくしがたく候。

目下は御さとしにより、御慈悲のありがたさを唯うら〜と喜び居り、稱名念佛に日を送り居り候。暗雲の去來險惡にして、日光のさへらるゝ事日夜に滋く候へども、一度味ひし醍醐味は行住坐臥に忘るゝ能はず、一度疑ひ晴れしおほ親の眞實心は何者の力を以つてするもまた疑はしめ得べからず候。吾れ乍ら斯る自信強き言葉の出で來る様になりしかと驚かれ申し候。七月の求道會には是非聴聞にまゐりたく候へども思ふにまかせぬ缺陷の身はいかが相成るかわからず候。

餘事にて候へども愚生の母親は、此の頃坂東報恩寺にまゐる様に相成候趣にて、御手まはしの有りかたさ感泣の至りに候。もし御暇も有之候節は一言御化導下され度、御願申上候。拙筆は愚生が缺陷の一端なれば御ゆるし下され度候。早々頓首。

五月三十日

原田 俊 之 助

成らん、諸の如來と等しとなり。

の文により、『諸の如來と等し』と仕て置いた。即ち信心喜ぶ者は、如來と等しい、といふのである。こは『和讃』にも、

信心よろこぶその人を、如來とひとしときたまふ、大信心は佛性なり、佛性すなはち涅槃なり。

此の味ひを話し度い、と思ふのである。

人生消極の悲み

四 先づ感じた事より言はうと思ひます。今度一番初めに参つたは、昨年九州に参つた砌、不思議の御縁で麻生家で話して居ると、其處へ或る大家の御主人老夫婦、弟御夫婦が御來聴下され、茲に私の話を聞いて下さる御縁が作られたのである。其の時私の處へ聴きに來て下さることを發企せられたが、其の家の老夫婦で、夫れは其前御長子が亡くなられ、其の爲め猶更法を聞かると、御縁が開けて來たのである。處が其後、別れて間もなく其の老夫婦が病氣になり、本年一月遂に腎臓の病氣で亡くなられた。其の亡くなられる時、非常に喜んで我が身の申譯けなきを語り、喜びながら、亡くなられた。殊に私との縁を、御本人は申すに及ばず、一家の人達が深く喜んで下され、全く昨年の御縁の爲め、あの如く合掌稱名して安らかな往生が遂げられたのであると、こは今度参つて初めて承はつたのである。今度其の御主人が、其の御不幸の爲め痛く悲んでお出になる、夫れにお話致さうと、参つたのである。色々に感じた事が多いのであるが、中にも今度は、斯る人生の不幸に遇ひ悲んで居られる其の有様を目の當り見せて貰つて、此方の方が話しするよりも、寧ろ此方が

其の實況に對し感ぜさせて貰ふた事が多かつたのである。寧ろ私の方が、或る一種の考を得させて頂きた次第であつたのであります。

五 夫れは、昨年初めて其の御主人にお目に懸つた時は、「佛が何うしても分らぬ」と言はるゝ爲め、「佛は我々の方から詮索し、搜すので無い。佛と此方と相撲を取るのである。そして此方が勝つてゐる間は分らぬが、彌々此の世が當てにならぬとなつた時、其の者を捨てさせ給はぬが佛の慈悲である」と佛に打勝たれた味ひが信仰である」と話したは、昨年來再々話した通りである。處が今度行きて感じたは、要するに上記の不幸で人生の悲みの方が深くして、其の人生消極の悲みを轉じて佛の慈悲の積極に立入る事が六かしく、又其の消極の方を見せて貰ふと、如何にも人生の當てにならぬは、無理からぬ事と感じたのである。故に今日は一面、人生消極の悲みの方面、及び夫れなるが故に如何に佛の慈悲を頂く可きかにつきて、話し度いと思ふのである。

皆なが自分程不幸者は無いと思つて居る

六 先づ行きて御主人に遇つた時、私は何氣なくこの事を申したのであります。夫れは先達で當地の高島屋の主人飯田氏が四十一歳になられる御老人に先き立たれて、小供が八人ある。八人の小供を置いて、御夫人が亡くなられ、私は其の御葬式にも參つて來た。話が横になるが、此の間も飯田氏か來て亡御夫人の事を話されて、「妙な事があるもので、今年の春も家内で話をうたひ、家内も一緒にうたつたのである。其の時家内が言ふには、自分達は定まつた仕事は無し、小供

が八人あるから、老後は八人の小供を、あちこち訪ねて、餘命を樂まうと思ふ。併し順當に私の方が、あとになればよきも、若し私の方が先に死んだら、其時は斯くく仕て呉れと、話した事がある」と語られた。處が先達で俄に産の爲めに亡くなられたのである。て此の話を飯田氏がせられたのが、丁度私の出立前であつたから、私は夫れが頭に有つたから、參つて遇ふなり、悲しき話をすると、悲しみを共に分つ積りて、何氣なく此の事を話したのである。

七 處が主人は私の話すのを、何かすまぬ様子にて聞いて居られたが、やがてほろりとなつて言はるゝには、「若い人が亡くなられたも困るだらうが、年とりて亡くなられたのも實に困る」と、私は此の一言で言葉を塞がれて、最早や何とも言ひやうが無い、成る程私の慰め方は逆であつたかも知れぬ。「若い人が亡くなられたも困るだらうが、年よりて亡くなられたも實に困る」と、如何にも人間は銘々自分々の境遇を、最も不仕合せと仕て居るに、他所の不仕合せを出して慰めんとするは全く、無意義であると思ふと、もう物が言はれなくなつて仕舞つたのである。聞けば主人は亡くなられた折、「一代苦勞艱難をさして、一代夫れて遣つて來て、漸く之からと思ふて居る中に、何一つ樂しませる事もせず、實に可哀相な事を仕た。一代あ、かうと苦勞ばかりさせて、有難い話も充分聴かざす、實に残念だ」と言はれたさうであるが、斯く此の時、挨拶も、若くて亡くられたも困らうが、年よりて亡くなられたも困る」と、ほろりとして仕舞はれたのである。

八 そくて私は夫れより段々慈悲の上より話して、先づ

私自身氣の就いた事は、人間は總て人生問題、信仰問題の上に於て、一人々々の愛へる所は、自分ほど不幸な者は無いといふ、この一つである。「自分のやうな性分は特別に悪い」「自分の如き特に悪い者は他に無い」と、皆な各自に然らう思つて居るのである。「世間の者に比べると、あれ丈けの財産に爲し上げて、死んでも不平は言はれぬ」などは他より眺めて言ふことにて、其の人一人々々にする時は「自分は特に不仕合せである、自分ほどつまらぬ者は無い」と、各自に皆な然らう思つて居るのである。従つて望みを立てる場合にも、他に比べるとそんなに激げかんならぬ要は無いと思はれる人でも、其の人に於ける時は、「自分程足らぬ者は無い、自分程不幸な者は無い」と、之が人間の凡ての根底になつて居るのである。

九 こは能く慈悲の上で、自分程悪い者は無いと言ふことに就き、五逆十惡など言ふ言葉はあるも、私の罪の深いことは、到底そんな言葉で言はれぬといふ人がある。成る程其の人に於ける時は、五逆十惡などいふ言葉は有つても、夫れは人並の言葉で、自分は人とは特別に、特に仕て見やう無く、悪いとなつて居るのである。て今の「若くて亡くなられたも困るが、年老いて亡くなられたも困る」と言はれた一言も、自分のは人と違つて、特別の不仕合せであることを言はれた言葉であると思ふと、之に對して他にも斯る不幸があると話すことは、其人にとりては何の慰めにもならぬ。成る程茲になつて平素頂く「歎異鈔」の

善人なほもて往生をとぐ。いかにいはんや惡人をや。て無ければ、到底満足させて頂けぬ事を深く思つたのである。

一〇 さてすると、佛の慈悲を致して頂くは、斯く我々一人々々が、斯く最も不仕合せなる自分なる事を佛かねて御覽になり、其の一番不仕合せなる汝故哀はれて捨てられぬとの御親切なることを頂かなくてはならぬのである。私が特別に悪しき者なることを兼ねて見せなはし下され、其の者の特に悪しく、不仕合せなの可哀相で離されぬとあるが、佛の大悲の根本なる事を、頂かなくてはならぬのであります。

特に悪しきを特に哀れみ給ふ

一一 こは斯く種々話して居る間に、又一人癩の持病で始終困つて居らるゝ女の方があつて、聴きに來て何うも苦しんで居らるゝ様子であつた。て私は其方に「何う頂いてお出でになる」と聞いて見た。すると言はるゝには、自分は兄弟三人有つて、皆な不仕合せで、中にも私が特別に不仕合せである。が佛は夫れでも斯る者を遣る瀬無く思召し下さると頂いて、喜ばして貰うて居るとの頂きやうであつた。之では到底安心が得らるゝ筈が無いのである。

一二 て私は其方に對し、「兄弟が皆な不仕合せであるが、中にも自分は特に不仕合せである。が此の者を佛は遣る瀬無く哀はれみて下さるでは、本當の安心は得られぬのである。何うかといふに、兄弟皆な不運な者ばかりであるが、中にもあなたは特に不仕合せである。爾るに佛はあなたの其の特に不仕合せな、そこが可哀相でならぬとの事である。今あなたが一番自分を苦しいと仕て居らるゝ、其のあなたの特に不幸なそこを見て下さるが、たつた一人佛なのである。今あなた兄弟中ても特に不仕合せであらるゝを見て、其のあなたのひ

とり不仕合せであるが、特に哀はれて捨てられぬとあるが、佛の哀れみである」と話したら、其の人大に安心して下された様子であつたのである。

一三 て斯く佛のお慈悲は、十方衆生平等の哀れみであつて、頂くは五逆十惡の惡人が、皆な等しく頂くのであると一口に言つてゐるのであるけれど、彌々自分々々といふ段になると、人間は「自分程不仕合せ、自分程不幸な者は無い」と、自分ばかりを考へる者故、何人も自分なる者の意義が無いとなるのである。處へ、其の特に不仕合せな自分に對し、皆んな合ひのお慈悲を聞かされるもの故、如何にしても安心がならぬのである。處が、其の特に不仕合せな者に致し方なき自分の身の上を、特に御覽下されたが佛の特別のお慈悲故、茲を能く頂かして貰はねばならぬのである。

一四 斯く話すと私は、いつも自分の小供の事に就き考へるのであります。私は小供が三人ありて、皆な夫れ／＼性質が違ふにつけ、之に對する此方の哀れみぶりが、又夫れ／＼違つて來るのである。氣の強いのは強いに就け、弱いの弱いに就け、又無邪氣は無邪氣で、等しく哀はれに思ふは同じであるも、其の思ひぶりに其の者々々の性質に應じ、夫れ／＼異つた思ひが出て來るのである。之より言つと、十方衆生等しく佛が哀れみ思召すは同やうであるも、其のお心の上より一人々々其者々々の特別の境遇、歎き、心中を御覽あつて、其者々々に應じ、哀はれと思召し下さる思召具合が一々違つて來るのである。

一五 こは始終言ふことであるが、『信卷』に在る善導師

て仕方なく聞きに來られたのであるも、今年は行くなり直ぐ聞きに來て、九州大學總長が遇ひに來ても、遇はずに夜遅くまで聞いて下されたのである。言はるゝには、「昨年あの時充分聞いて居れば、親が存命中どれ程の満足せられたか知れんのであるに、昨年は聞くは聞いたが充分に聞かず、爲めに親の存命中に喜びが見て貰へないで實に残念である、こんな事なら親の存命中に能く頂いて、親に喜んで貰つて置いたら」と、之がづしんと胸に來て居るのである。それで初めて聞かるとかといふに、然らざや無い、「前聞いた事あるも、其時は氣を取り詰めなければならぬと思ひ、炭坑の奥深い處に這入つて今死ぬると氣を取り詰めて見たけれど、何うしても分らなんだ。其中或る本を讀んでる中に、自分の方から救けるので無いといふ事を思ひ、夫れでは死ぬたら助けて貰へるのだらう位になり、逐ひ／＼こんな事になつて仕舞つた」と言ふて居らるゝのである。此の方が今度は大層熱心に聞いて下されたのであります。

一八 そこで私が申すには、「成る程夫れ程親を慕はるゝは誠に結構と言はなければならぬ事である。去りながら、今あなたも昨年親の存命中に充分聞かなかつたは濟まぬと、夫れ程身を苦しめ心を勞さるゝは、親の喜ばれぬ事である。今あなたも自分の性を兼ねて、見抜いて、下さる親は、あなたが昨年聞かれなかつたとして、夫れを不足に思ふ如き、そんなあなたも自分の性を知られぬ親ぢや無い。併し然らういふあなたの性を、あなたに對する親の御親切である。故に其の親の慈悲が分れ

の如意の釋が之である。『觀經』に神通如意といふことがあつて、其の如意を善導師が知らせ下されて

一には衆生の意の如し。彼の心念に隨つて、皆應に之を度すべし。二には彌陀の意の如し。五眼圓に照し、六通自在にして、機の度す可き者を觀すに、一念の中に前無く後無く、身心等しく赴き、三輪開悟して各益すること同じからざる也。

とある。即ち私共一人々々の心中を觀して、其者々々の境遇心狀、悲み、歎き、缺乏、其者々々の身上に應じて、哀れみ化益して下さる處も同じく無いのである。結果は同一の廣大なお慈悲一つをお知らせ下さる外無きも、其者の性分々に従つて、種々心を廻らし、哀れみ導きて下さる、其のお心の運び具合が皆な違つて來るのであります。

子供の性を知らぬ親ぢや無い

一六 さて主人は夫れ程悲んで居らるゝのであり、殊に昨年あれ迄喜んで下されたのであるから、法の話が手易く這入るかといふに、這入らぬ。何故かと言ふに悲しみ極つて、お慈悲で慰める餘地さへも出て來ぬのである。言はるゝには、「昨年お目にかゝつて、家内は分つて喜び、有難うございます」と昨年夫人が分つて喜ばれたを、今度夫人が亡くなられたにつけ思ひ出して喜ぶといふ喜びになり、今現に然らう居る自分を遣る瀬無く思召し下さるといふ喜びに何うしても出て來ぬのである。處が今度は反對に、お子さんの方が聞いて下されたのである。

一七 夫れは次男の方であるが、昨年は親に聞けと言はれ

ば斯くの如き自分に、親は夫れ程迄に思つて、下れたのであつたか、有難いと、其の親の御親切を受ければ宜しいは無いか。親はあなたがそんな事に氣を苦しむるよりも、お慈悲を聞いて呉るゝのが、何より本望だと言つて、下さるのである。親は此方が悪しければ悪しきにつけ、言うことを聞かぬば聞かぬにつけ、其の聞かぬ奴をばい／＼かぬと捨て、仕舞はずに、其の聞かぬ奴故彌々其の者の爲めに遣る瀬無く心を痛めらるゝが親である」と話したら、此の時初めて此の點に大に意を安んじて下された事である。

一九 處が斯く一方は親子の關係故、直ぐ喜んで下れたのであるも、一方は夫妻の關係故、自分の方より哀はれむといふ方が強くなり、「自分が斯くお慈悲一つで參らせて貰ふから、あなたも同やうに何うか此のお慈悲一つを頂いて下され」とある、亡くなつた妻の心なることが、頂けんならぬに、頂けぬとなる。

妻子珍寶及王位不隨者

二〇 そこで話してゐる中に、ふと私は大に感じたのであります。それは、ちか／＼と寧ろ私自身が大に知らせて貰つたのであるが、何かといふに今迄悲しき場合に遭遇つた事は幾らもある。それは親、妻を失ひ悲む事は誰でも同やうであつてあなたが比較するでは無けれども、特に此の方の場合に於ては、夫れが成る程とお察しする事が出来るのである。

二一 夫れは人間は、大なり小なり、其者々々の境遇に従つて、或は自分の家事につけ、或は自分の仕事につけ、何等かの望みを持ち、考を抱いてゐる間は、猶ほ此の人生の上に、

爲めに人生的になるのであるけれど、兎に角ハキ／＼と其の望みの爲めに全體が動いてる様が見えるのである。處が參つて其の宅の様子を見るに、如何にも廣大な邸の中に、今度なども立派な新築が建ち、其處で私に話して呉れとの事であつたけれど、雨がふつて話しに行けなかつた程故、實に宏壯な邸宅である。其上一方には猶ほ盛に普請がどし／＼初つて居る。さて人間は、何か望みを持ち、やつとる間は、又夫れ丈けの楽しみがあるのであるけれど、其の宅の様子を見るに、斯く家を建て、盛に樹木など植えて居られるけれど、其の物の上に更に望みといふものが見えぬのである。

二二 これは何故かと言ふに、人間は是れ丈けの財産を作つて、と思ふて居る間はまた夫れ丈けの望みがあるで有らうも、熟々様子を見るに、何事も最早や皆な出来上つて仕舞つて、更に此の上あかうといふ望みが無くなり、何をやつても世の中は、此上面白いことが無いとなつて居るのである。人間は決して夫れをよいといふては無けれども、拙い物喰つて居る間は、まだ何でもといふ望みがあるのであるけれども、あれも之も、思ふ事は皆な出来上り、飽き足りて見ると、さて人生は無意味なもので、何をやつて居るのか薩張り分らぬ。建て度き家は建て、植えて度き樹は植えても、もう斯く飽き足りて見ると、他より見ても一向精の無いもので、つまり人生に欲といふものが、最早や見えぬのである。

二三 而も夫れが世間に在りうちな、夫れは大きな家や財産は、有る事は有つても、夫れが親譲りとか、又は公共的のものであるといふと、其感じは少いのである。設へば早い話

思ひ來ると、如何にも人生のあじなき様が面の當り見ゆるのである。私はそこで實によき事を知らせて貰つたのである。二六 夫れは私は金を持ちた経験はなけれども、夫れが幸に金が出来、之ほどの大した身上になつたとしても、ひと度び死の問題に行き當ると、夫れが斯く何の役にも立たぬ様を眼前に見せて貰うたのである。言ひ換へるとつまり私が思はぬ莫大の金を一遍に與へられ、夫れを忽ち失つた味ひを、忽爾として私自身が知らして貰うたのである。

二七 早い話が私共宗教上有形無形の事に就き 設へば斯く私が諸方に傳道して、皆さんが喜んで下さる。すると信仰上の事であるから、物質上の實とか成功といふものとは違ふやうであるけれども、矢張り人間故、人間方面は多くの人が喜んで下され、法が弘ること、か、信者がふるとかいふ結果が何うしても目につくのである。すると慈悲の上でありながら、不知不識の間に矢張り事業風になり易い。すると沉んや其の他の政治であれ、教育であれ、實業であれ、何を仕やうが結局人生の効果は斯く畢竟當てにならぬ様を、眼前目に見せて貰うたのであるかと、私は茲で人生の消極方面が、あり／＼、ずらりと私の心中に目に見えて來たのである。すると

佛かねて知しめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけりと知られて、いよ／＼たのもしくおぼゆるなり。

佛の知召し下されしは、茲を知召し下されたのであるかと、色々に思つて居る中に、續々私の心中に分て來たのでありま

が、本山の如きものであつて見ると、皆んなで寄合つてやつて居ると思ふ故、左程にも思はぬ。處が獨力で一代やつて、やり抜いて、爲す可き事は爲し上げて、あれ丈けの精力を出して、其の充分飽き足つた結果が之れであると思ふと、はたから見ても世の中は面白く無いと、感ずる迄に夫れがあるのである。

二四 さて茲迄に立至りて、茲へ死といふ問題が出て來たのであるから、尤て人生が何の事だか分らぬのである。斯く之ほど迄に爲し上げて、殆んど人間界で想像も及ばぬ果報な身の上になり、さて之から妻にもらくをさせ度いと、思つて居らるゝ矢先きに、がらりと亡くなられたのであるから、同じ人生の無常を感じるといふにも、如何にも感じやうが別であらうと思つたのである。「論註」の中にも

顛倒の善果、能く梵行を壞す。

といふことが仰せられてあるが、如何にも其の如く、斯くも此の世の果報が多い丈けに、夫れ丈け失望もひどいて有らう。其の此の世の果報にも段々あるが、全く獨力で茲迄至られたは實に例少い人故、夫れ丈け御心中の程も私には能く分るのである。茲になると如何にも釋尊の説かれた

妻子珍寶及王位不隨者

で、全く人生は何一つ當てにならぬとの事を、私は色々見て居る中に、スーッと私の心中に感じ來つたのであります。

佛かねて之を知召し

二五 サアすると平日一應言うて居る位の事で無い。設ひ人生に於て如何なる成功を仕やうと、結局人生は之である

す。

二八 サア然らうなると、「ア一佛は之をかねて知召して下さられたのであるか」之を遣る瀬なく思召し下さるのであるかと、もう感涙に咽びて、人に話しどころか、自分が其の意見捨て無き仰せに腹ふくれ、「如何にも人生は之ぢや、人に何のかのと言ふて居るけれど、彌々となると斯く當てにならぬのぢや、之を佛は兼ねて知召し、此の醉生夢死が可哀相との大悲より、此のまことならざる私を、之を捨てぬとの御まこととは」と、茲を皆様に能く頂いて貰ひ度いのである。

二九 て斯く一面、人生の消極かこれほどひどくなつて見ると、積極の慈悲に移れぬも、實に無理無い事と思つたのである。人間はあまり悲み極まると、もう話を聞き分ける餘地さへも無くなつて仕舞ふのである。又反對に、私共人生の喜びに浮かれて居ると、今度は又人生の當てにならぬことを知らせて貰ふ餘地がなくなつて仕舞ふのである。昔から、地獄は苦みが多くて法が聞けず、天上は楽しみ極つて法が聞けぬ。人間界が丁度聞くによいと云ふのも之である。私共彌々聞いて頂かせて貰へるは、苦しい中にも苦しい心中に慈悲が届いて下さる餘地ありて、初めて頂かせて貰へるのであります。

大悲の積極は人生の消極の極所に在り

三〇 話が二分混雑するが、今度は同時に其處へ御來聴の御存知の峠さんであります。峠さんが一昨年御上京の歸りに友人の赤松さんと申す方に、私の本を土産として贈られた。それが縁となりて其の赤松さんの御主人が、大層お喜び下さられたのである。其の赤松氏の御夫人が昨年重症に罹られ、醫

師より見ると、最早や何うしても助からぬ、といふ事になつて仕舞つた。夫れが平日頂いて居られた爲めに、其の彌々危篤となつた時に、不思議にも危険よりまぬがれ、遂に全快せられたといふのである。

三一 何うかといふに、昨年彌々最早や駄目となり、自分にも漸次死が近かよつて、氣が遠くなつて來た、すると傍についてお出になる御主人が言はるゝには、「こんなに早く別れやうとは思はなんだに、彌々別れなくてはならぬか。子供等にも分れをさせたらよからう」として、お子さん達が、皆な火鉢で手をあたいめては、お母さんの頭を撫でられる。其の時ふと其の御主人が「こんなに早く別れやうとは思はなんだに」と、言はれた一言が耳に這入り、「自分は決して此の儘別れるのでは無い、皆なが共にお慈悲を喜ばせて貰ひ、自分は先き浄土に參つて待つのである」との事が、すつきり其の言下に分つて來て、其の時皆なんにも立派に別れの言葉を告げられた。さうして其の儘氣が遠くなつたのであるが、醫師の注射で再び戻り、戻つてから漸く其の時の事を色々思ひ出し、泣けてゝならなかつたといふお話である。之は前とは反對に、平日頂いて居られた爲に、彌々死といふ人生の消極極まつた刹那に、積極の大光明が現はれて下された話なのであります。

三二 今度も其の御夫人が其の事を話されて、「私が喜ばせて貰うたは、平日の極些細な人生の煩悶といふ如き、つまらぬ事より喜ばせて貰ふたのであるに、夫れが實に一大事も、是れ程の後生の一大事とは思はなんだ。平日些細な事より喜ばして貰うて居て、斯く迄の有難い事はありませぬ」と、

ます。

三五 今の赤松夫人の場合に仕ても、彌々今死ぬとなると息が絶える故、イヤでも應でも、肉體は別れなければならぬ。然うなると、然うなる自分を兼ねて知召し、お見捨て無き佛のまことばかりは捨て給はぬ故、浄土に參らせて貰ひ佛になるは疑ひないとなる。故に斯くの如く生死の際に力強くある事が出來たのである。故に肝腎は唯此のひと所である。其のひと所は、私の不まことを、飽く迄捨てさせ給はぬ佛の御まことにましますといふ、此の一所である。此の飽く迄お見捨て無きまこと一つさへ頂けば、設ひ此の世の不まことが如何にばげしからうが、此の御まことある上は、是れ程有難いことは無いとなるのである。今度九州でも至る所て話したは唯このひと所であつたのであります。

お慈悲と私と出違ひにある人

三六 これは能く氣を附けぬと、何うも茲佛の御まこと、私の不まことが、出違ひになり易いのである。設へば能く御同行の方などが、「私の虚偽不實の胸の中に、佛の清淨眞實の御まことを頂いて……」といはれる。夫れが丸て言葉丈けになつて居るが多いのである。虚偽不實と言つて居るも言葉ばかりなれば、清淨眞實も言葉丈けに止まつて居るのである。そんな佛の清淨眞實と、私の虚偽不實と、別々に頂けるわけのものぢや無いのである。

三六 何うかといふに、分り易く言ふと、私共が日常實際の間柄などに於て、彼の人には親切なる人である、すなほなる人である、誠實なる人であると、此方が感服して何うしても

喜んで居られた。其の時の主治醫の方も、此の事實にびつくりして、「眞宗の安心は、丸て禪見たやうなものだ」と言うて居らるゝを聞き、私は「こんな有難いことを、禪位に言はれてはたまらぬ」と話した事である。爲めに其の主治醫の方も、今度は聞きに來て下された。之が今の人生の消極が轉じて、積極の大慈悲となつたものである。

三三 處て茲に肝腎なは、何人も「此の世が當てにならぬ」、「自分は罪深くして仕やうが無い」といふ、此人生消極の方面だけなら、誰も分るのである。それ故茲で、「さて斯く仕やうの無い身なれども、佛は之を助け給ふのである」此の世は當てにならぬが、未來は極樂に參らせて下さるのである」となると、忽ち茲で此方の消極と、佛の積極の恵みとが出違ひなつて、頂かれぬのである。頂けると頂けぬとは、茲一つに在るのである。

三四 佛のお慈悲は先き言ふ如く、私が殊に不仕合な、其の殊に仕て見やう無いのが殊に哀はれたとの大悲故、私共が斯く當てにならぬ、斯く仕やうの無い、其の一點光りの無い其處を御覽じ下されて、汝が仕て見やうなく、虚假不實なれば不實なほど、其の一點まことなき不實の汝が捨てられぬとある佛のまことにましますのである。故に彌々まことならぬ私と、其の爲めを捨てさせ給はぬ佛の御まことと、遂に佛の御まことに打ち勝たれて、不ままことの私が敗け、斯く迄やるせなき佛の御まことにまませしかと、私が佛のまことに頭が下り頂けた時、初めて當てにならぬ此世であつたと、人生から手が離され、お慈悲一つに安んじさせ貰へるのであり

頭の上らぬ人がある。之が此世で所謂まことある人といふそのまことである。爾るに向うはそんなに迄氣の廻らぬ誠實な態度で此方に向はれてるのであるに、夫れに對して自分は如何の態度で向つて居るかといふに、自分は其人を疑ひ、惡しく氣を廻はし、表には何氣なき様につき合つて居るも、心には斯く／＼の惡しき不まことを抱いて居るとなれば、夫れて我々が眞に安心が出来るか何うか、と斯ういふ問題であるのである。

三八 之は私共自分々に考へて見れば、能く分るのである。即ち此の場合にありて、我々「自分は先方に對して惡しき不まことの考を持つて居るも、併し向うは飽く迄まことを以て自分に向うて呉れるのである」。又「此の世は何時知れぬ、當てにならぬ人生で、如何にも妻子珍寶及王位不隨者である、けれども佛はまことを以て私に向うて下さるのであつて極樂にやつて下さるのである」と、之で我々ほん／＼に安心が出来るかといふに、到底安心が出来ること無いのである。其の出來ぬは何故かといふに、之では人生の當てにならぬことや、私の不まことであるのと、佛のお見捨てなきまこととが、出違ひになつてあるからなのである。即ち斯く不まことなる當てにならぬ自分が、今死ぬるとお慈悲で極樂に往けるといふ、茲頗る虫のよき問題になつて居るからなのであります。

三九 然らば其の當てにならぬ、不まことの我々が、何處で安心させて頂くか、といふに、私は嘗つて「此の世は罪深く仕て見やう無いが、未來は極樂にやつて頂く」といふ頂きやうを仕て居らるゝ人に對して、「此の世で既に罪深く惱ましき

有様であつて見れば、其の者が死んだら勿論地獄へ行くぢや無いかと言ふた事がある。私共既に此の世が罪深く、當てにならぬといふ事は、即ち言ひ換へれば私共が永劫に闇といふ事にて、即ち永劫助りやうが無い身の上のことである。すると此の世は當てにならぬが、未來は極樂といふ頂きやうは畢竟言葉のあやに過ぎ無いことになつて仕舞うのである。

四〇 サアすると佛のお慈悲は何ういふのか、といふに、今言ふ如きそんな私の虚偽不實で仕て見やう無いこと、佛より夫れを遣る瀬無く助け給ふ事とが、別々に在るのでは無いのである。佛の眞實の大悲といふは何うかといふに、私が今現在の不實が可哀想で捨てられぬとある佛の御眞實なのである。私が今斯く罪深く淺ましいのが哀はれて捨てられぬと、私の此の不實に飽く迄愛想をつかさず、不實なれば不實なるほど、よけい其の者を遣る瀬無く言ふて下さるが、佛の大悲の眞實であるのである。

四一 之を先さより言ふ諭で言ふと、私の方は先方に悪しき考へを持ち、隔て心で向うて居る。爾るに向ふは其の私に飽く迄善き思ひを持ち、親切にして呉れるのである、となると、之では、向ふの好意が有難いと言ひながらも、夫れは何處迄も自分の悪いところを押し隠して、即ち體よく自分を繕ろつて、向ふの親切を受けてるといふ頂きやうで、甚だ横着な頂きやうとなる。即ち私は悪いことして居るけれども、向ふは頓着なく善く仕て呉れるから有難いといふ、横着根性である。又之が反對に出ると、向ふはあれ迄に親切にして呉れるのに、自分の方は悪しき考が止まぬで、實に濟まぬと、今度は自分

の悪しさが氣にかゝる遠慮心になつて來るのである。即ち自分の方が悪くて濟まぬと、今度は何處迄も消極一方になり、悪くていかぬ濟まぬと、我が悪しさをばかりを悲むとなる。斯く横着に出るか、遠慮して引込むかの何れかとなり、之では到底本當の安心にはならぬのである。

吾が眞實は疾くより汝の不實を見抜いてなり

四一 すれば私共、彌々本當に安心をさせて頂くは何處かといふに、其の向ふの親切なる氣のよき人といふが、唯一應の氣のよいて無く、其人が斯く色々悪しき計らひ根性で計らつて居る自分に對して言はるゝには、「お前の心中に持つて居る隔て心も、お前の隠して居る疑ひの根性も、自分の方では疾くには皆な知り抜いて居るのである。お前が當てにならぬ」と言ふて居ることも、お前が自分に對して悪しき心で向うて居る事も、自分の方では疾くには皆な知りて居る。お前は夫れを知らずに、わしの方で今迄親切に仕て居ると思つて居るのであるが、お前の夫れを知つたればこそ、知れば知る程夫れが可哀相で、彌々お前が捨てられぬ心より、長い間修行工夫の結果、こしらえたのが極樂浄土なれば、お前の不實を知り抜いて、夫れが何うしても捨てられぬのが我が眞實である」と。茲を能く頂かして貰はねばならぬのであります。

四三 故に御同やう佛の眞實を頂くといふは、斯く如何なる私の不實も不實にすればする程向うの方からは彌々眞實に仕て下され、私の方がやればやる程其の上と向うから遣る瀬無く言うて下さる御親切である爲めに、遂に如何なる不實の私も、茲でとうと此の方が頭が下り、「夫れ程迄に私をお見ると、茲で今迄此の廣大なる御恵みある事を知らずして、彼れ是れ思つて居つたは皆な自分の申譯けなきあやまりとなり、茲で今迄の人生の立場が一變して來るのである。茲をよく氣をつけねばならぬのであります。(この講話次第に續く)

先生には益御壯健にて布教に御盡粹の至り、誠に何より御目出度き事で御座います。野生義先生には海山にまさる御高恩を蒙りながら、一向冷淡に打すぎ、誠に慚愧至極であります。然しながらありがたひことには、二號「求道」開卷第一「利他眞實の信心」と御示し下された中に

而して最も肝要なることは、如來の清淨と我等の不清淨の關係であつて、我等の不實を見抜いての如來の眞實とは
いかにも有難い、南無阿彌陀佛。嗚呼先生に對しては、唯慶喜讚歎より外は無い。南無阿彌陀佛々々々。

北海道にて 葛 西 諦 導

捨て無き眞實であつたか」と、茲で其の御眞實一つに腹ふくれ我身の悪しさが氣にかゝらぬやうになつて仕舞ふのである。我々が何故我が身の不實が氣にかゝるかといふに、自分の不實を善くせんならぬと思つて居るからこそ氣に懸る。爾るに其の如何にしてもよく出来ぬ夫れが捨てられぬとある御眞實と分れば、其の御眞實一つに腹ふくれ、斯る仕て見やう無き私を、お見捨てなき御眞實の有難やと、有らゆる自分の不實も其の御眞實の爲に氣に懸らぬやうになつて仕舞ふのである。其の代はり如何にも自分の不實が申譯け無いと、之を他より見ると最早や不實を仕やうと仕ても再び出来ぬやうになるが、お慈悲に腹ふくれた味ひである。之が眞に佛の清淨眞實に夜の明けた味ひなのであります。

四四 故に我々此の人生の仕て見やう無き上より言ふ時は、宗教、教育、政治、實業、何をやらうが罪ならざるは無く、虚偽ならざるは無く、所謂、世間虚假惟佛是眞である。併しながら其の虚假不實を奥の奥迄知り抜いて夫れを飽く迄見捨てぬとの仰せが斯くひと通りで無い故に、遂に此のお慈悲に打明かされ、謝り果て、頂く故に、今度は設ひ商ひをもし、奉公をもせよ、獵すなどりをせよである。斯る仕て見やう無き俗界に在る上は、如何に思つても世の中の争ひも已むを得ぬことを知らせ貰ひて、お慈悲一つに安んぜさせ貰ひ、行くとなる。併し安んぜさせて貰ふと言へばとて、平氣で争ひを仕てよいとやうのことは一點も無い。何うかといふに、去りながら何程争ひを止めやうと思つても自分には止められぬ、夫れ迄知り抜かせられて、其の爲めのやるせなき御親切と分

歎異鈔

近角常觀

第十三章 (續)

彌陀の本願不思議におはしませばとて悪をおそれざるは、また本願ほこりとして、往生かなふべからずといふこと。この條本願をうたがふ、善惡の宿業をこゝろえざるなり。よきこゝろのおこるも宿業のよほすゆへなり、惡事のおもはれせらるゝも惡業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには卯毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるへしとさふらひき。

歎異鈔十三章は實に他力眞宗の骨髓惡人救濟の眞面目を顯はしたまひし極處である、是即本願不思議といふことである、其本願の不思議といふは大小の聖人、輕重の惡人、皆齋しく選擇大寶海に歸して、念佛成佛せしめたまふことである、しかるに我等の善惡の所作如何によりて救濟せらるゝと否とを

分つこゝろが去り難きものである、そこで知らず／＼の間に罪福信する行者となりて本願を疑ふことになる、和讃に曰く罪福ふかく信じつゝ、善本修習するひとは、疑心の善人なるゆへに、方便化土にとまるなり、此疑心の善人といふ言が頗る著しき造語である、此の言と恰も一對になりてある御言は歎異鈔第三章にある、他力をたのみたてまつる惡人といふ造語である、前にも既に業に詳論したるが如く、歎異鈔としては後の八章の異義を歎く各章のめやす即標準として、前九章を挙げられたるものである、而して恰も後の各章に對して前各章の應ずること、兩手の各指其合するが如きものである、故に此第十三章に對して第三章は即ち標準となるべき祖訓である、故に其意を以ていたゞくときは、最もよく惡人正機の本願不思議をいたゞくことが出来るのである。

先づ此問題となれる根本の異議をよく味はねばならぬ、彌陀の本願不思議におはしませばとて悪をおそれざるは、また本願ほこりとして往生かなふべからずといふこと、此一語々々を決しておろそかに見てならぬ、最も誤解に陥り安いのはこの惡をおそれざるといふことである、第一章に、しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なき

ゆへに、惡をおそれざるべからず、彌陀の本願をさまざまのほどの惡なきがゆへに、先づ歎異鈔を拜繙するものは、開卷直に大に驚かざるゝ所である、而して歎異鈔につきて大に膝をすゝめて信順の頭をうなたるゝも、首をかしげて聊か不審をいなくも先づこゝである、而して兎角いたゞいた様で不審のはれやらぬも、大にいたゞいたつもりて大邪見に陥るも此處である、先づ惡を恐るべからずといふ造語が大に誤解し安い言葉である、俗語で言へば惡いことを仕てもよいといふ意味にとれるのである、大邪見に陥るのは是である、而して歎異鈔をあふながるのも此一點である、惡いと仕てもよいといふ誤解は、左右に大に間違つてゆくのである、第一に惡いことを仕てもよいといふ語氣には、我はまだゝ惡いことを爲す余地が澤山あるといふとにて、まだ餘程善い氣で居るのである、所謂憍慢の人である、兎角此種の人が大邪見に陥るのである、下に擧げてある所謂惡をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざと好みて惡をつくりて往生の業とすべきよしをいひて、やう／＼にあしざまなるとのきこを候ひしとき、業あればとて毒をこのむべからずとこそあそばされて候は、かの邪執をやめんがためなりと仰せられたが是て

ある、惡を仕てもよいと思ふゆへに、わざとこのみて惡をつくる様になるのである、この已上に爲すべき惡はないと、眞に我身は現に是れ罪惡生死の凡夫と自覺した者が、惡をしてもよいといふ誤解が起る筈はない、惡を仕てもよいと思ふ故にわざと好みて惡をする様になり、遂に惡なればこそ御助け／＼といふて、惡が往生の正因であるかの如く間違つて仕舞ふたのである、夫故現に此異義に陥らぬ様に戒めらるゝのである、是は昔ばかりではない、眞の御慈悲を頂だかぬ、今でも知らず識らず是になり安いのである、又第二に同じ惡いと仕てもよいといふ語氣の裏には、しからはせずにおくことも出来るのである、我等は自分の謹み次第にては惡をやめることが出来るのである、善を爲さんとすれば善も出来るのであるといふ事になる、此種の人には惡を止めねばならぬ、善くせねばならぬといふて頭を下げつゝ、矢張憍慢に陥るのである、而して特に此章に於て戒めらるゝのは此種の傾向である。故に善惡の所作は宿業の所爲なれば、善を爲さんとするも爲すべからず、惡を止めんとするも止むべからずとて諄々と訓戒したまふのである、然らば惡を恐れざるといふは、惡をしてもよいといふ意味でないとするれば、如何なる意味であるか是が

最も要點である。

是には最も適當なる御言がある、二河喩の西岸上の招喚に汝一心正念にして直に來れ我能く汝を護らん、すべて水火の二河に墮せんことを畏れざれとある、惡を畏れざるとあるは恰も是である、俗語で言へば惡を氣にし心配をすることである、即ち善をせねばならぬ、惡をしてはならぬと、惡を心配をして罪福を信じて自力の善を修せんと氣にするところである、しかるに本願の不思議にてましますゆへ御文に、所謂阿彌陀如來の仰せられけるやうは、末代の凡夫罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をは、かならずすくふべしと仰せられたり、即罪は如何ほどふかくとも、我能く汝を護らん、水火の二河に墮せんことを畏れざれと仰せらるゝゆへに心配をするな、彌陀の本願をさまざまのほどの惡なきゆへに、如何に我等が罪業は深くとも、本願の不思議を妨ぐるほどの惡は存在せぬのである、即愚禿鈔に我能護汝とあるを釋して、能言對不堪也疑、心之人也とある、能の一字は能ふといふ文字である、如何なる罪惡も救ひ能ふといふことである、しかるに我等は如何にも罪深きゆへに救はるゝに堪へずといふなれば、そは殊勝氣なれども疑心の

人である、佛智不思議を疑ふことになる、所謂疑心の善人と

なるのである、然らば如何に信ずることが佛智不思議を信ずることになるかといふに、勿論惡をしてもよいといふことではない、此已上に爲すべき惡はなきゆへに第三章に云ふが如く、煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、ひとへに惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり、是がすなはち惡をおそれざることである、佛智不思議を信ずることである、和讃に不思議の佛智を信ずるを、報士の因としたまへり、信心の正因うることは、かたきかなかになほかたし、即此佛智不思議を信ずるの

が往生の正因である、そこで他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なりと仰せられてある。故に彌陀の本願不思議におはしませばとて惡をおそれぬといふのである、本願の不思議なるゆへ惡を恐れぬのである、此佛智不思議を信ずるが往生の正因といふことは如來會の御言に
彼國衆生若當生者皆悉究無上菩提到涅槃處何以故、
若邪定聚及不定聚不能了知建立彼因故（證卷所引）
とある。また

化身土卷本御自釋に曰く、凡大小聖人一切善人以本願嘉號爲已善根故、不能生信、不了佛智、不能了知建立彼因故無入報土也。
とある、彼因を建立せることを了知することあたはざるが故にといふ意味を深く了解せねばならぬ、和讃に、至心信樂欲生と、十方諸有をすゝめてぞ、不思議の誓願あらはして、眞實報士の因とする、即ち佛が誓願を建立したまふのは、一往の誓願ではない、不思議の誓願である、正信偈では、建立無上殊勝願とある、其不思議といひ、若くは無上殊勝の願といふは、逆も助かるまじき惡人を助けんといふことが不思議である、諸佛の本願に於て助かるまじき惡人を、殊に助けんがための五劫思惟の本願なれば無上殊勝である、故に彼因を建立したまひし本意は、逆も助かるまじき我等惡人を助けたまふといふことである、是が彌陀の本願不思議におはしませばとて惡を恐れぬのである、本願の不思議を信ずるゆへに惡を心配せぬのである、特に注意するは不思議におはしませばとての文字は恐れざるにつくのである、往生かなふべからずにつくのではない、しかるに其本願の本意を了知すること能はざるがゆへに、惡くてはたすからぬといふことに思ひ誤りて、佛智不

思議を了らず、本願の嘉號を以て己が善根となして、我稱ふるが故に助かると誤るのである、第十一章に所謂自らのほからひをさしはさみて善惡のふたつにつきて往生のたすけ、さはり、二様におもふは誓願の不思議をばたのますして、わがこゝろに往生の業をはげみて、まうすところの念佛をも自行になすなり、このゆゑに名號の不思議をもまた信せざるなり、即ち誓願の不思議名號の不思議を信ずることが出來ぬのである、常に繰返すところの譬喩であるが、世上に於ても救濟といふことは貧窮なるものゝために企てられたるものである、是即ち彼因を建立せんとてある、貧民のための救濟たることを了知しないものは、我如き貧窮下賤のものといふて辭退卑下するところが、却て救濟の本旨に反することになるのと全く同一轍である、東北に飢饉がある、慶島秋田に震災あるときに、陛下大御心を憐ましたまひて待從を遣はしたまひ、草鞋掛けにて災民を見舞たまひ、衣食の料を下したまひしとき、災民恐懼に堪えずして、我等卑賤のもの、此の如き恩遇をいたゞくに堪えずと言はゞ如何、是待從を遣はしたまふ聖意を了知することあたはざるものである、たとへ恩遇をいたゞくに堪へずとまで言はずとも、何んとか待從に對して厚遇し奉らざるべ

からず、御宿を用意せざるべからず、食膳を調へざるべからずと言はゞ如何、民衣食に窮するを救済したまはんが爲に、特に待従を遣はしたまひて、特別の恩遇を興へたまふに際して、我より却て厚遇し奉ることに腐心するといふは、管に滑稽たるのみならず、却て聖意を空しくし、大御心を頂戴せざるこゝとなる、是が彼因を建立したまへることを了知することあたはず、佛智を了らず、不思議を信ぜぬといふことになる。今彌陀の本願不思議におはしませばとて惡を畏れざるといふは、正しく本願の不思議を信じて、他力をたのみたてまつる惡人である、しかるに彼因を建立せることを了知することあたはざる律法主義の疑心の善人は之を批難して、彌陀の本願不思議におはしませぬへに惡を畏れざるは、また本願ほこりとて往生かなふべからずといふ異義を主張するに至りたのである、彌陀の本願不思議におはしませばとて惡を恐れぬといふは正義である、夫を批難して是亦本願ほこりとて往生かなふべからずといふ異議を生じたのである、是て正しく此章に於て正さんとする誤の根源を大略叙述したのである。

諸猶其已上に注意しておかねばならぬ點がある、此の佛智不思議を信じて惡をせざる正しき信仰に對して批難をし

て、また本願ほこりとて往生かなふべからずといふのである、此またといふ字と往生かなふべからずといふ語とを注意せねばならぬ、またといふは他に本願ほこりといふ誤があるが、之をもまた本願ほこりの中に入れて、云々するといふ意味である、所謂惡くてもよいといふて殊更に惡をつくる如きは、洵に本願ほこりといふべきである、然るに今本願に相應して我惡を氣にせず、他力をたのみたてまつりて惡を畏れざるをも、また本願ほこりの中に入れて云云するのである、此章が本願ほこり全體を辯護せんとする企てではないのである、されど律法主義の人が、他を本願ほこりといふと批難して廢善修善を主張するもの故に、之が異を正さんために書きたるのである、しかるに佛智不思議を信する正しき信仰のとき、本願ほこりと自認して本願ほこりを主張するものゝやうに考ふると、反動として他の極端に奔るとなる、このまたといふ文字は明らかに他に本願ほこりと名けらるゝものゝ存在してあつたことが分かる、殊に惡を畏れざる佛智不思議を信する人に對して、往生かなふべからずといふのである、此一語は實に正反對の批難である、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因である、之に對して往生かなふべからずといふのである、であ

るから大間違である、抑々他力信仰に於ては往生のかなふとかなはぬといふは、左右の分水岐をなす語である、所謂即得往生、言を換へて言はゞ往生一定とか、往生決定とかいふ意味にして、往生の得否といふことは信心決定未決定といふことである、しかるに、近時青年の氣風には頗るこの文字を軽く味ふ癖がある、たとへば歎異鈔第九章に、よく／＼案じみれば天におどり地におどるほどによろこぶべきことをよろこばぬにて往生はいよ／＼一定とおもふべきなりとあるをよみても、よろこばずにもよしといふ位の意味に了解する弊がある、故に甚しきに至りては自ら稱して若存若亡であるとか、疑ひながらの往生とかいふ言葉を用ゐるやうになる、これは畢竟決定とか一定とかいふ、所謂徹底的なる言語を避くるのである、最も甚しきに至りて、いつまでも自力こゝろのあるやふな、いつまでも權假の思想が存するものゝ如く考ふる傾がある、是は畢竟信仰の上に決定味即ち徹底味が存せぬから自然此弊に陥るのである、抑々親鸞聖人の信仰には、殊に此點が特徴なのである、全體法然聖人の念佛をうけて信するほかに別の仔細なきなりと仰せられたが、抑々決定問題である、信心の一念に即得往生を言はるゝも、必得往生と言はるゝも、現生正定聚も、攝取不捨も、畢竟皆この決定が本である、現に言南無者の御釋に

言必得往生者彰獲至不退位也、經言即得釋云必定、即言由願力光闡報土眞因決定時刻之極促也、必言分極也、金剛心成就之願也。

とあるのが是である、殊に曇鸞大師が不如實修行相應を釋したまひて、不淳心、不一心、不相續心の三不信を擧げて、若存若亡、不決定、餘念間故とまで戒められ、道綽禪師は如實修行につきて此反對の三信を擧げたまひた、正信偈には之を三不信の誨懲勉とたたまひて、三不信が即他力信仰の分水嶺である、其他報化二土の辨立にせよ、信疑の得失にせよ、是が

聖人の信仰の特徴であつた、眞宗の眼目である、抑々教相判釋とか廢立決判とか立教開宗といふとが、即ち此聖人信仰の告白であるに、信仰已外に教理があつたり、宗學があつたりするやうに考へるのが誤である、古來信仰の教理化したのも固より採るべからざるも、今日青年が時代思想に流れて、聖人の信仰の決定味徹底味を實驗せざる點も大に注意せねばならぬ、諸かく往生かなふべからずの一語に注意せば、現に本願の不思議を信すれば惡をも畏る可らず、彌陀の本願をまたぐる惡なきゆへにと、往生決定して、他力をたのみたてまつる惡人もつとも往生の正因を得たるものに對して、往生かなふべからずといふのであるから正反對の異義である、最後に再三注意を拂ひておきたきは、彌陀の本願不思議におはしませばとてといふ文字が、直接に惡をせざるに被らせずして、往生かなふべからずといふ文字に被る様に解し安いのである、私の如きは知らず識らずとゆう意味にとり安かつた、即ち如何に彌陀の本願は不思議におはしますとは言ふものゝ、惡を恐れざるは、本願ほこりとして、往生かなふべからずといふ様に解し安い、しかし熟考してみれば、彌陀の本願不思議におはしませばとて惡を恐れぬといふは、たしかに本願不思議を信じ、佛智不思議を信するゆへに惡を畏れぬといふとて、即他力をたのみたてまつる惡人にして、信心の正因を得たる人である、夫を異義者が是亦本願ほこりの一なりといひて、往生一定の人を往生かなはぬといふのである、是たしかに彼因を建立することを了知することあたはざるゆへに本願を疑ふ、邪定聚不定聚の人にして、罪福を信じ善本修習して、我はからひにて善をなし得べし、惡を避け得べしと思ひて、善惡の宿業を心得ざる人である、夫故此條本願を疑ふ善惡の宿業をこゝろえざるなりと仰せられたのである、此一語中々意味深長にして、且つ宿業問題に關するゆへ、次回に詳しく辨ずることにする。

求道學會第二求道會 講話概況

求道學會 (聽講 甲記)

五月三日 雨 前庭の新緑愈々深し。本日の講話は「他力の修行」なり。始めに先づ既に信を得られたる人は益々念を入れて聽聞し、末信の人も六ヶ敷事と思はずして直に遺棄なき大悲を頂かれよと述べられ、それより本題に入りて他力念佛の真旨を説仰せらる。其要旨は南無阿彌陀佛の六字は我々が努めて稱へばならぬと云ふことではない。この六字は如来より我々に對して與へ給ふ大行である。行とは通例のおこなひの意味で、いま南無阿彌陀佛の行と云へば、矢張り自分はこの六字を稱へて、心を清くして行くように聞える。そうして法然聖人の御弟子の多くは、念佛をこの意味にとつた人が多いのであるが、獨り親鸞聖人のみは念佛を以て我々の行とはしない、彌陀の方から我々に稱へさせ給ふ大行である。如来が飽迄罪深く障重き我々を見捨てたとの大悲の御呼聲であると見て下された、近頃世間で或る方面の腐敗問題が曝露されたのであるが、元よりこれに對して寛容一邊でもゆかぬが、しかし、目下世人の考へて居るやうに飽迄之を追究するのみで廓清の目的が達せらるゝかは問題である。そうして廓清を呼聲して居る人が中心一點の抜いぬかどか、之れも疑問である、さればかく人間同士の考へておしあひへしあひして居るのでは、どうしても根本的に埒が明かるとは思へぬ。それでほどにて光りが現はるゝかと云へば、この世間敷き有様を見捨て給はぬ佛がましますと云ふ唯一點にあるのである。人間の中に求めてはならぬ。他力の修行とは、正にこの大切な味に外ならぬことである。抑も吾人が人生何れの方面に於て、少しでも善く出来るならば他力の修行と云ふことはいらぬのである。然るに我々の思ふこと爲すこと一つも未當の事はない、皆迷ひである。そ

うして我々は佛の救済といふことを知らずして、愈々迷ひの深味に陥り、遂に絶對絶命の窮境に立ち至りて驚き悲しむも、もう世間からは誰一人助けて呉るゝ人も、同情して呉れる人もないのであるが、佛はかく御慈悲を下さり迷ひ苦しむものも飽迄も見捨て給はず。南無阿彌陀佛の御名を與へて、救ひの力の現存することを知らしめて下さる。是に於てか、如何に罪深く障り多きものも、この大悲の呼聲をきいて始めて大満足なことを頂くことが出来るのである。されば南無阿彌陀佛の六字は、佛が飽迄我々を見捨て給はぬ御苦勞の塊りである。萬善萬行の總體である。救済の偉大なる力である。凡夫自力の小さなかな行ではない、他力廣大の眞實行である。

五月十日 半晴 例苑開講。先づ先生は兩三日前より久しぶり少しく發熱の氣味あり、且つ咽喉を傷め、昨日は九段の講話を休み、猶其間諸方の御縁を缺きたるを遺憾とする旨を語られ、且つ病中に於ける種々の感想を述べられたり、さて近頃殊に青年の人々が道を求めらるゝ事多き爲、今日は別に課題をも設けず、成るべく平易に御話しすべしとて、先づ信仰上最も肝要なる點は、我々が理想と實際との常に矛盾するが爲に心を苦しめらるゝ事である。詳く云へば、我々が各自の境遇に就いて色々考へ悩み、世間の義理や生活問題に就いて様々苦勞をする我々の心、それが問題となるのである。さればどうして安心するかといふに、一應考へれば、成るべく實際を理想と一致するやうにとつとめ、すべて出来得るかぎり善くするやうにやればよいのであるが、しかし充分それが行へたり、世の中が思ふやうにゆくものなれば結構であるが、實際どうしてもゆかぬ。そこで我々ばかり思ひやうにゆくものなれば結構であるが、かうなつて来るともう人生上一點の光りをも認むることは出来ぬ、自分の學問や修養もつとも間に合はぬ。人の同情もそういつまでもは續かぬ、たゞ孤影落葉、空しく死地に陥る外はない。さればかやうになつたものはもう何とも致し方はないか。否々不思議とも不思議。我々がかく徒らに死を待つて苦しみ備へて居るものを、唯一人それが如何にも不便である、可愛想である、どうあつてもその者が見捨てられぬといふて下さる、大悲の方がましましたのである。これが即ち佛である、如来である。我々は一たび此温かき佛の慈愛を胸中に感じ來るとき、あゝ自らごときかやうに世間から見捨てられしもの、罪多く障り多きものを、それほどまでに思召し下さるのであるかと、佛の前に頭がさがりて、たゞ御慈悲一つに夜が明けさせて頂き、もう理想と

第二求道會 (聽講 乙記)

五月二日 「龍命速満足」と題して説かる。淨土論に「佛の本願力を觀そな

實際の衝突も、すべての心の惱みも、掃かれて、所謂破開滿願の徳を得させて頂くのである云云。と諭し玉ひぬ。

五月十七日 題は「明信佛智」なり。「明信佛智」の反對は即ち「不了佛智」にて、吾人が此世に眞實救済の道を得るや否やは、唯佛智を明信するや否やにある旨を實際上より詳説し給ひぬ。而して談は眞摯なる青年求道者が、眞摯の餘り容易に得難きものゝ如く思惟する誤解に及び、要は唯御慈悲に夜が明くると否とに在り。夜が明けざれば十年の求道も寸効無く、一夕の間法に廻心能入すれば十年の積悪も忽ち攝取光中の妙好人なり。眞面目なる人の往々人の喜びに疑義を抱くはさることなれど、其の種の人ば容易に得られぬと信仰を過重するの餘り、やがて法の威力を疑ふになるを思はざる可らずと戒め給ひぬ。

五月二十四日 雨後晴。今日は 皇太后陛下御大葬の當日にして、今宵八時を期し、大御帳を青山の殯宮を出て立たせ給ひ、永久の御居所と定め給へる桃山に向はせ給はんとす。されば學舎に於ても、盡きせぬ御名残を惜しみ奉らん爲、佛間を莊嚴して、靈牌を奉安し、心づくしの供物を捧げ、講話前參禮者一同と共に、鄭重なる勸行を修せらる。阿彌陀經、正信偈の後、聖德太子三首を誦誦せらるゝや、一同期せずして、故陛下護持養育の廣大なる恩徳を追慕し、歎歎泣涕せざるはなし。勸行後荏原氏參禮者一同に代はりて焼香せられ、次いで先生の小感話あり。更に講話の席にうつりて、先づ四天王寺本願緣起の文を引かれ、故陛下の御信佛の念殊に深く、御一生の間民草を愛撫指導せしませし事の、必ず廣大なる御恩召あるべきを拜察するに難からずと述べられ、次いで釋迦の慈父の抑止の嚴なるは、やがて彌陀の悲母の攝取の至らざるなきを示し給はんと爲なりてふ有難き御話あり。講話を了り給はんとしたるとき、街頭號外賣の鈴の音聆しく、本日御大葬に際し、大赦の令を布かれたるを報ず。先生早速其一枚を手にし、讀んで此れを拜讀し、而して今回の御布令が、重層の悪人等しく平等に恩澤に浴するを旨とし給ひたることは、方に大赦令の眞精神にかなへるものにして、佛の本願の法上に顯現し玉ふとも云ふべく、實に予が十年來の主張を事實に見るを得たるものなりとて、今上陛下の御盛徳を仰ぎ感涙に咽ひ玉ひけり。

はすに、遇ふて空く過ぐるものなし、龍命速かに功德の大寶海を満足せしむべしとあり。信心は今まで聞いた事の無いことを聞くと思つて聞かぬと其味は分らぬ、人生眞に心の満足するもの無く、何ものも眞の頼りとならない。我々は何れの道も及ばない。斯くして迷ひ苦しむ、致し方無きものである。去れば眞に頼りとなるものが無くてはならぬ。然るに此處で口先だけで佛の救ひを言ふてはならない。人生の事はそれごと、たわごと、まこと無き我々を觀そなはして、哀れであると思召し下さるのが佛の本願である。その遣る瀧無き御心を私共の心に聞いた有様が今のお言葉である。到底善く出来無いか、世の中が頼りにならぬと云ふ消極の方は一應誰も分るが、斯る我々の境界を哀れと思召し、如何に淺聞しくも救はれば置かぬと言ふ大悲大悲を以て現はれたまひたのが南無阿彌陀佛である。誠でない、備みの人生を見捨てないといふ遣る瀧無き佛の恵が南無阿彌陀佛である。故に人生は唯南無阿彌陀佛一つである。この本願力に我々が出遇へばその一念に淋しい心に功德の大寶海を満足せしめられるのである。そして此の功德が南無阿彌陀佛一つであると云ふのが親鸞聖人のお示しである。

五月九日 先生御不快の爲め御出席遊されず。寒暑を通じて極めて健康なる先生としては誠に稀有の事なり。荏原雅亮師代講せらる。師は善知識の仰せなれば兎角の遠慮無く話させて頂く事の有難しと嘆じつゝ、廣大なる御慈悲を頂かれし自覚を説かれたり。曰く。寺に生れし自分が學生々活を終へ、僧侶として世に立つこととなつた時、はたと突き當りた。自分は從來御開山や蓮如上人の書かれた事は御自身の信じた事と嘘言てはなないが、自分等は昔の人の如く單純な思想で無から信ぜられぬと思つて居た。當時學生等の間に坐禪が非常に流行し、私も鎌倉のある禪寺に入つた。坐禪をやる者が其の悟りなど得らるゝもので無いが時々相當の光を認める。是は今迄て木で讀んで居た處と自分の感じと大に異つて面白のである。私も今は僅かの光であるがこの坐禪で何處迄もやつて行くことと決心した。然るに自分の坐禪の上の見解と御開山の御信心とが一つか何うかを時々比較して見ると、何うしても異つて居る。御木書別序の仰せの如く自分のほ

矢張り自性唯心であるが、自分には是より外に道は無いと考へた。處へ郷里から親戚の者が一人自分の寓居に來た。此の青年は甚だ變つた徑路を辿り、從來永く基督教の信仰を聞き、終に英語研究と稱して基督教の學校に入つたが、其の信仰は駄目になつた。終には佛敎も信ぜず基督教も信ぜられず、全く無信仰になつた。且

つづけて親戚の者の死に會ひ、自分も身體に弱い處があり、非常に無常の感を感じ、或時熱心に私に尋ねた。是迄て口ではかり坐禪の氣類を吐き、あやふやで過ぎた私は此時初めて人間の眞剣になつた有様を見た。其翌々日青年を近角先生に紹介した。處が其人は先生に大に叱られ内心腹を立て、歸つて来たが、つら／＼考へて自分が分つた如く考へて居たが矢張り自分の分らぬものであることを感じ出した。其後歎異鈔を讀みて著しき入信をされた。麥からが一變して、實に觸光柔順の有様を知らされた。勤行の間にも何時も泣いて、實に諸の毛口より汗を流して懺悔して居る。其の語る處は自ら經論聖經の文句を實驗の上から明かに言ふので、自分は佛言廣大勝解者とは此事だと思はれた。然るに私の方は何等の感じも無く、空虚であるので狼狽し出した。然し自分は其人にも先生にも自分の心を打ち開けて信心を聞くことが出来なう。先生の相伴をして御同朋方と金澤なる如信上人の御墓に参つた夜、此時こそ打ち開けてお尋ね申すと、先生は尤もであると同情下され、御教化下された。其時は有難く頂いたが、併しまたぼうつとした。其後一夜先生の御宅にて二人の方と同時に御教化に預つて、深夜の歸途歎異鈔の二章を讀んだ。まことに念佛は淨土にむるゝたれにてやばんべらん、また地獄におつる業にてやばんべらん、總じても存知せざるなり。今迄では知らんと仰せられても嘘言であると思つて居たが、今更其處の處を讀んで行く間に不思議にも存知せずと仰せらるゝのは眞に存知し給はぬのであつたと云ふ事を感じて誠に恐れ入つた。實に永い間、間違ひだらけに間違つて居た事の勿體無いと深く懺悔し、其後は廣大な御慈悲を眞に有難く頂いて居ります。云々。

五月十六日 「如来と衆生」と題せらる。法を信ずると云へば、誰しも始めは自分の方より佛を如何に考へ、如何に信ずるか、信仰であると考えたのが一應無理無けれど、他力の信仰は佛が我々に對し、如何に哀みを垂れて下さるか、云ふ遣る漸無き思召を聞くのである。我々が惡るければ悪いだけ、哀れに思ひ、不實の者に飽くまで眞實にお見捨て無きのが佛の思召である。人間の上では其上／＼飽くまでもと云ふ事は出来ない。我々佛を信ずると云ふて、一通り御慈悲の有難い事は分つても、結局これではならんと云ふ思ひが絶へない。然るに自分の善く出来ないのを知つて、飽くまで哀れみ下さるお慈悲である事を聞いた時に、最後にそれほど迄のお慈悲であつたかと此處で始めて徹到するのである。歎異鈔には「くちには願力をたのみたてまつるといひて、こゝろにはさこそ惡人をたす

けんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそたすけたまはんとすれとおもふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまいらするこゝろかけ渡地の生をうけんこと、もともなげきなもひたまふべきことなり。云々また修行信證に引きたまへる如来會の御文に「彼の因を建立したまへることを了知し能はざるが故に云々」彼の因とは南無阿彌陀佛の六字の因である。何時迄て經つても決して善く出来ないのを哀れに思召し給ふお慈悲なる事を頂かねばならぬ。

五月二十三日 「大悲母」と題し 皇太后陛下がお慈悲深くあらせられたる御恩を拜戴する上から佛のお慈悲を頂かんとて祝かる。人生は相對の世界で我を以て向へば人も我を以て答へる。我等が自身の我に苦しむのに氣附けば無我にせればならぬ事が分つて来る。斯く無我にせんと力むる事が仲々苦しいのみならず、始めの内はよいがこつちが是丈げやつても向が認めて呉れないと思ふ様になり結局立ち行かぬ事になる。然し種々に力めた最後は、人が何うあらうとこちらが絶對に善くすればよいと云ふ事になるが人間はそれが出来ない。そうしてこれは私共が五分／＼疲れ切つて争ふ事などで解決が附かぬ處迄て行つたのである。然るに飽くまで善くすべきのが我々には出来ないのを見て、その出来ないのを哀れみ給ふが大悲の母である。一步も許さざる嚴父の教に對し、悪しければ悪しき程見捨てられぬのが悲母の心である。大無量壽經に釋尊は唯除五逆誹謗正法と仰せられたが、觀無量壽經には事實五逆の罪が起つて来た。悪いのがいかんぞと云ふは、それが可愛相であると思ひ下さるのである。親鸞聖人は斯を御覽になつた。釋尊が一代善い事をして救はると説かれた教は、善い事をすべきのが出来ないのが哀れだから、大慈大悲の恵みを垂れ下さる事を示されたのである云々。



第四回夏季求道會

時 日 七月五日ヨリ十二日迄八日間
 每 朝 午前八時 開 講
 每 夕 午後七時 信仰談話會

會 場 本郷區森川町一番地中通 求 道 學 舎

講 本 親鸞聖人「教行信證」信卷末聖人悲歎
 之文以下涅槃經阿闍世王入信之文
 講 題 人生問題と信仰問題

(來・聽・隨・意)

近 角 常 觀

求 道 學 舎

近角常觀 著

懺悔錄 附錄「歎異鈔」

第八版 定價 二十錢
袖珍 四錢
美本

本書は著者が實驗の信味に基づき從來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と其後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇傾に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し是れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人ならず。

人生と信仰

第五版 定價 卅錢
袖珍 四錢
美本

●第一章 人生問題と信仰
●第二章 悲觀思想と信仰
●第三章 倫理力行と信仰
●第四章 犯罪心理と信仰
●第五章 社會問題と信仰
●第六章 國家秩序と信仰
●第七章 世界宇宙と信仰

本書内容は目次に示すが如し。先年『求道』秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。▲以上の二書は是非どなたも讀んで下さい

發行所

東京市本郷區森川町一番地
振替口座東京一六六九六番

求道發行所